妙宗別刊

文字布教講二冊

宗綱提要

篇目

本化妙宗の宗意は
如來出世の本懷を發揮し
本佛金口の宣示を遵守し
末法救護の憲教を宣布し
本化色讀の唱導を眞遂し
法界一乘の妙義を光揚し
思想道德の統一を實現し
常寂光明の世界を開點し
閻浮統一の名教を建立す

篇意

閻浮統一の名教に聽けよ
常寂光明の世界に遊ばん
思想道德の統一に至るは
法界一乘の妙義に基ぬす
本化色讀の唱導に隨順し
末法救護の憲教に服從し
本佛金口の宣示に照され
如來出世の本懷に契うは
本化妙宗の信なり

無宗教の民

宗教を信ぜざる民は無精神の民なり無誓願の民なり文明に根抵を認め得ざるの民なり吾國現下の病弊は國民自ら無宗教を恥辱とせざるに在り

偶々幸福

されど是れ或は吾國の幸福なるやも知れず何者吾國には國の害となるべき宗教盛に跋扈して根抵より國性を傷はんとしつゝあればなり國民の宗教に冷淡なるは偶まこの深害を避けんとする自衛の天然作用なるやも知れず果して然らば是れ國靈の奇特に依り又本佛の擁護に依るものなり

儲積せる渴仰

自衛作用によりて有害の宗教を避けたる國民は宜く時代及國土の唯一救護たるべき眞の宗教あることを知りたる曉その儲積の渴仰力を傾けて此れに歸向すること大旱の雲霓に於ける水の卑きに於けるが如くならざるべからざるなり

人文の大成

人類の原始は人類同一なり然らば歸着も亦同一ならざるべからず宗教は本の木より終りの枝に徹して之を一貫す人類の宗教に於ける終に一に歸せざるべからず天地各精神を一にす人も一精神に歸せざるべからず世界は終に一の宗教に歸着して人文の大成を告ぐるに至るべし

佛教の本領回復

佛教は世界の縱横事物のすべてに於て最第一の大なる事實なり故に佛教の大事は佛教そのものゝ大事にあらず世界の一大事なり佛教の流化がその本祖の意に背いて支離滅裂しつゝある現狀は世界に於ける大事變なり之を糾明回復する事業は世界の建造に次げる大事業なり

世界の最高事業

本化妙宗は佛教を統一し世界を統一し神人を調和し理と事とを實際に妙化せんが爲に建てられたる世界最高事業の唱導なり

宗綱

本化妙宗ハ如來出世ノ本懷トシテ本佛釋尊金口ノ宣示スル所末法救護ノ憲敎トシテ本化聖祖色讀ノ唱導スル所、已ニ出デ今出デ當ニ出デントスル宗見學見種々ノ忘想邪謂ヲ打破シテ法界唯一乘ノ妙義ヲ光揚シ人類ノ思想道德ヲ統一シテ常寂光明ノ眞世界ヲ現出センガ爲メニ建立傳弘セラレタル閻浮統一ノ名敎ナリ、

宗綱提要

師子王學人　田中智學述

緒言

宗綱は本化妙宗の宗意を詮要して、『本化妙宗とは如斯宗旨である』といふことを一言で合點させるように造られた綱領書である、組織的に講究するには『妙宗大意』などを見るが可い、それにしても宗意の概念を先さに會得んで置くのが、信仰にも研究にも甚だ利益であるから、略して宗綱の要義を提釋して、妙宗研究の階梯に供したいとおもッて、『勅語玄義』に次で、此篇を述べたのである、法華經の正義が日本國體の精神だといふことが知れたら、その次には是非その法華經を知らねばならぬ、敎學的に知るよりも、先づ達意的に知らねばならぬ、本化妙宗といふものに仕上げた法華經を知るのが捷徑である、それが此『宗綱提要』である。

一　如來出世の本懷

元來、佛が世に出現せられた趣意はといへば、一切衆生を、御自分と同じような樂みを得させたいといふのにある、佛と同じ樂みを得させるに就ては、佛と同じ考を持たねばならぬ、こゝに於て一切衆生に佛知見といふて、佛の有して居る智慧を與へねばならぬ、乃でこの佛の知見といふものが、注入的に他から强て注ぎ込むものか、又は開發的に自ら有ッて居ながら埋沒して居るのを啓ひてやるのかといふに、一切衆生ゞのく本來に具へて居るのであるが、佛の化導見といふて、煩惱情慾の心が盛んであるために、それが隱沒して居るのであるから、佛の化導としては、それを開發するのにある、それが即ち開顯である、元よりあるものを出すのだから、出來ないことでは決してない、たゞ開發の方法如何にある、たゞ理論的に是れのあれのと理屈で詰めたばかりで開けるものでない、元が理屈以外の情で籠ぢられたのだから、その情を融解しなければならぬ、即ち佛の智慧と慈悲との二つで誘うのである、智慧は眞理を票榜して錯ら

ぬ羅針の如く、慈悲は活動を與ふる蒸氣機關のようなものであッて、この二大佛光に照らされて、凡情がそのまゝ佛知見化するのである、一念三千の智光、三世益物の恩光、相加はり相發して、一切衆生に一種强大なる電化的作用を與へるので、春風に花の咲くが如くに、開佛知見するのである、佛の誓願といふのはこれより外にない。

諸佛の本誓願は我が所行の佛道なれば、普く衆生をして亦同じく此道を得せしめんと欲す（法華經 方便品）

我れ本、誓願を立て、一切衆生をして我が如く等しくして異なること無からしめんと欲しき、我が昔の所願の如き今者已に滿足しぬ、一切衆生を化して皆佛道に入らしむ（法華經 方便品）

一切衆生をして我が如く等しくして異ること無からしむるが、世に佛ある所以の一大要件であるとして、

諸佛世尊は唯一大事の因緣を以ての故に、世に出現し給ふ、舍利弗いかなるをか諸佛世尊は唯一大事の因緣を以ての故に世に出現し給ふと名くる、諸佛世尊は衆生をして佛知見を開かしめ、淸淨なることを得せしめんと欲するが故に世に出現し給ふ、衆生に佛知見を示さんと欲するが故に世に出現し給ふ、衆生に佛知見を悟らしめんと欲するが故に世に出現し給ふ、衆生をして佛知見の道に入らしめんと欲するが故に世に出現し給ふ、舍利弗是れを諸佛は唯一大事の因緣を以

ての故に世に出現し給ふと爲す（法華經方便品）

この念願の爲めに、久遠劫來一刻片時も間斷なく、どうかして一切衆生を導きたいと、三世益物の化導が息まないのである、

毎に自ら是念を作す、何を以てか衆生をして無上道に入り、速かに佛身を成就することを得せしめんと（法華經壽量品）

この念願の爲に、法華經を說くので、佛知見即ち法華經である、故に法華經を說くために、佛は出現したものだといふ結論になる、釋尊の母后摩耶夫人が、釋尊を懷妊したのを、『摩耶夫人は、法華經を妊みたり』といったのは此道理である。

二　本佛釋尊金口の宣示

人を佛にするのが、佛の本懷である以上は、佛にすべき法を是非說かなくてはならぬ、人を佛にする法とは、佛の種たる根本智と根本慈との正體を明かした敎行、即ち法華經である、然るにこの法華經を、如來出世の本懷と定めることは、如來みづからの宣告によったので、決し

て後世の論師や人師の推量臆斷で究めたのではない、敎主みづから自己の宗旨を發表して、三世を貫いての化導が、只この法華經に在ると宣告せられ、殊にこの至法を貼して滅後末代の一切衆生を救はうといふ大慈悲の訓誡あるに至ては、何人も異念異議なく、一齊に法華經を奉じて、佛敎の眞意義に接しなければならぬ筈である、然るに佛敎諸宗の學者敎家は、おの〳〵自らの見識を本として、毫も佛の宣示を重んじないのは、明かに逆路伽耶陀である、佛は法華經より外に佛敎はないぞと說かれた、

十方佛土の中には唯一乘の法のみあり、二も無く亦三も無し、佛の方便の說を除く（法華經方便品）

然るに何故諸宗の人は法華經以外の經を奉ずるのであらう、「天に二日なく國に二王なし」の道理で、佛敎の中心がいくつもあるといふことは斷じて無い、但し法華經以外の經でも、多少の利益はあるからといふなら、それはその用に應じた部面だけに用ふべきで、これを以て宗と定めるといふことはない、「宗」とは宗主といふことで、最尊無二として奉ずるの謂ひである、若し他經と法華經とは、名目が變るだけで、その內容が一つものだといふなら、佛は「三說の校

量」といふことをなされる筈がない、三説の校量とは、佛みづから御自分のこれまでに説かれた經を、法華經と對校て同じてない、大なる差等があると決判せられたのである、即ち

我が所説の經典、無量千萬億にして已に説き今説き當に説かん、而も其中に於て此法華經最も爲れ難信難解なり、藥王此經は是れ諸佛の秘要の蔵なり（妙華經法師品）

これで法華經以外の經は、法華經と同一内容でないといふことは確められて居る、他の諸大乘經に幾分の法華經的眞理を含有して居るにしても、それは誘引の料に加味したもので、むしろその經の主成分ではないから、組織的には全然權教である、よし多少の得益があッても、それはその經の利益ではなくて、功は法華經に歸すべきものであるから、所詮は無得道の抜殼であると定められて、若しや佛説たるの故を以て人が遠慮すると惡いから、釋尊みづから、その無得道なることを斷りて、

諸の衆生の性欲同じからざるを知る、性欲同じからざれば種々に法を説き、種種に法を説くこと方便力を以てす四十餘年には未だ眞實を顯さず、是の故に衆生の得道差別して、疾く無上菩提を成ずることを得ず（無量義經説法品）

と決判したのは、これから説かうといふ法華經の一大事たることを確實にするため、これまでの四十餘年の經教を未顯眞實なり無得道なりと宣告なされたのである。

いかなれば佛教を奉じながら佛の制裁に背いて、法華經を度外したのであらう、「四十餘年未顯眞實」の一語は、實に佛教研究の先決問題ではないか、なぜかういふ明白なる榜示を知らぬふりて通ッたものであらう、

乃至、餘經の一偈をも受けず（法華經譬喩品）

の大斷さへ、少しも神經に感じないものと見える、これが感じないほどの痲痺かたては、そのいふ所の理義も到底滿足なものとは謂はれないではあるまいか。

佛教の事を決するには、先づ佛説を本としなければならぬ、この大綱領が一つ弛んだら、際限なく勝手な理屈が出て來て、どうにも始末が着かなくなるから、佛あらかじめ之を憂慮して、先づ第一に『人の語に依るな、經文に依れ』と規定し、更に同じ經文でも『了義經に依れ、不了義經に依るな』と、丁寧懇篤に涅槃經の中に誡められてある、いかなる人でも、凡そ佛經を讀

んだほどのものが、法華經を了義經でないといふものはあるまい、して見れば法華經の金文こそ、他の經典を成敗する所の目安であッて、この誡令に背いたものは、非佛教的見識に墮したものである、それが厭だから、佛みづから經典の取捨を定めて、滅後末代のものゝ惑ひのないように「法華經より外に眞の佛教はないぞ」と宣告なされたのである。

勿論、滅後の弘教に就ては、法華經以外の經でも、ある場合に於て利益あることを説かれてはある、又實際に應用して、立派に益を爲した時代があッたに相違ない、けれども、それは正法像法の二時代であッて、末法當今の時代に應ずべきものではない、またその益といふのも、補益であッて正益ではない、いかなる場合でも、餘の經典で成佛得道の主益はないものと、佛既に明確に掟てられてある、よしそれが効能ありとしても、時代が既に過ぎ去ッた曉は、救濟問題としての教法では、何の用にも立たないものと謂はねばならぬのである、こゝに於てか時代に乘けての研究が必要となッて來る、佛もすでに教法は時代の救濟として貽すのだと仰せられて、教法正益を時代で定められてある。

三　末法救護の憲教

それで此法華經は、別していつの世の爲めとか、又は誰れの爲めとかいふ局限はない、いかなる時でも、いかなる人でも、つまり皆この法華經によらなければ、完全に救はれることは出來ないのであるが、正味純粋に應用すべき時と、何ものかを間てゝ用ふるか、又は何か混ぜて用ふるか、その小部分を用ふるかの異ひがある、凡そあらゆる聖人賢人が、いつの世いかなる處にて、眞理正道の幾分たりとも説て人を導いたその正しい言行は、すべて皆この法華經の眞理を含有して居るのである、況してかりそめにも佛菩薩の説いた教法といふものは、この法華經の道理が含まれて無い筈はない、阿彌陀如來を念ずるには、法華經をも捨てよと、法然親鸞等の人は教へたのであるが、その肝心の阿彌陀如來の宗旨はといふと、『常に樂て是の妙法蓮華經を説く』と經に説てあるから、やはり法華經を主義とせられたものとなッて居る、又釋尊一代五十年の説法中、法華經を説く前は、全く一人の成佛得道したものはないかといふと、そう

てもない、華嚴經でも、方等敎時代でも、般若敎時代でも、幾分かは有ッた、有るは有ッたが、それは皆法華經の力であるとしてある、法華經已前にどうして法華經を說いたかといふと、「不待時の法華」といふて大體に於ては、說く時節が來ないうちは、法華經を說かないのであるが、時に一部分の人があッて、全體の大勢より抽んでゝ入實すべき機類の發生した場合には、その機類だけに窃かに法華經を說いて得道させたのである、それから又法華已前の諸大乘には、その中に幾分かづゝ法華經の眞理を含ませてある、それは直接法華經を用にたてる趣意ではないが、調整の爲め、ならす爲め、他の方便の敎法と調合して說いたのである、ところが機根成熟のものは、早く此機械水雷に觸れて得道することがある、それを「毒發不定」といふ、毒藥を食物の中に混入して置くと、どこかで其毒が發するといふ譬で、これは法華經を毒に譬へ、その毒で無明の煩惱を殺すのを成佛得道したといふことであッて、釋尊一代の說法は、小乘經を除くの外、すべての經敎に法華經を含有して居ないのはない、それゆゑ緣の熟したものは、いつ何時どこで、法華經の機械水雷に觸れるか解らない、苟くも眞理に悟入して得脫したといふのは、時と處のいかんに拘らず、皆この法華經の利益である、然れども正しき法華經の時節として、混雜物なく純一に法華經を說いて、正式の濟度をするのは、在世では一代五十年の最後の八ヶ年、滅後では正像末の三時の中には、第三末法の時と、この二度にきまッて居る、そのうちても在世よりは末法の方が、別けて法華經の正時節であッて、畢竟在世の法華經も、表面は在世の人の爲めであるが、裏面の實意は、滅後（殊に末法）の爲めであるとしてある、現に法華經の肝心たる壽量品の法門は、特に後世の爲めにといふので、彌勒菩薩より請願して開說せられたのである

願くは佛未來の爲めに演說して開解せしめ給へ、若此經に於て疑を生じて信ぜざること有らんものは即ち當に惡道に墮つべし（法華經從地涌出品）

また壽量品の中に、佛みづから末代の爲めに此實義を說く趣を述べさせられて

是の好き良藥を今留めて此に在く、汝取て服すべし差じと憂ふること勿れ（法華經壽量品）

と曰ひ、又本化上行を末法の導師として、この大法を付囑せらるゝ趣を

使を遣して還て告ぐ（法華經藥草品）

とも說かれてある、特に此法華經が末法の爲めであることを明示して、

我が滅度の後、後の五百歲の中、閻浮提に廣宣流布して斷絕せしむること無し（法華經藥王菩薩本事品）

とある、後五百歲とは、五個の五百歲（釋尊滅後第一の五百年間が解脫堅固の時代、第二の五百年間が禪定堅固の時代、この一千年間は「正法」の世、第三の五百年間が讀誦多聞堅固の時代、第四の五百年間が多造塔寺堅固の時代、この一千年は「像法」の世、第五の五百年が鬪諍堅固の時代、此五百年は「末法」の初め此後九千五百年間を「末法」といふ）の最後の五百歲、即ち末法の初期にして、日蓮上人の降誕が末法に入って一百七十一年に當り、建宗が入末第二百二年、龍口の法難が第二百二十年、身延退隱が第二百二十三年、御入滅が第二百三十一年、斯く末法の初期法華經主義建設時代の正中に於て、經文の豫證通りに、法華經の大精神を發揮なされて の化導があったのは、全く天の成せる大聖人が、法性流化必然の救濟作用として、時代唯一の救護法としての正敎を開宣なされたのである、故にこの本化妙宗は、末法時代に於ける唯一絕

對の憲敎である、憲敎とは凡そこの時代に生を得たものは、何人でも必ず奉ぜねばならぬ、先天の約束ある敎法といふことである、釋尊の嚴命、佛法の歸着、法界の樞機、天人ともに同歸する所の至法、國家も取って以て正式國敎となさねばならぬ、世界人類も最後の歸着をこゝに致さねばならぬのである。

四　聖祖色讀の唱導

釋尊は法華經の開說者である、天台大師は法華經の解釋者である、傳敎大師は法華經の整理者である、この次に來るべきは法華經の實行者でなくてはならぬ、即ち心に證るばかりでなく、理義に示すばかりでなく、身に行って見せなければならぬ、即ち法華經の具體的發現を要する の順序となったのが、末法の檜木舞臺である。

解釋說明はモー十分である、この上に理義を增し個條を殖すのは、思慮の足らないものゝすることであって、眞の經世家の爲すべきことでない、口で解釋するよりは身で解釋して、活け

る眞理の標本を與へなければならぬ、それが法華經の色讀といふのである、「色讀」とは身に讀むといふことである、日蓮上人の化導は、法華經を身に讀んだので、上人一生の行動は、即ち法華經の活きて働いたのである、これが上人の純法華經家たる所以で、常にみづから「法華經の行者」といふことを繰返された所以である、正法傳來の順序關係よりいふから、釋尊—天台—傳敎—日蓮と三國四師の相承を列ねるようなものゝ、實際を言へば、釋尊—日蓮の次第となって、天台、傳敎の二師は、仲介者なり旁證者なりてある、なぜなれば、天台も傳敎も、心に法華經を讀んで未だ身に讀まないからである、身口意の三業に法華經を讀んだものは、法界唯だ釋尊と日蓮上人とのみてある、故に內證相承として、左の系譜を正意とするのである、本化妙宗としての眞面目を顯はすのは「內證相承」て、謂はゞ是れは本領である、たゞそれが杜撰孟浪の斷定でない嚴正なる發展の歷程があッて、此に至ッたものてあるといふことを示すのが「外用相承」てある、「內證相承」は自を顯はすの意、「外用相承」は他を判ずるの意、兩意相俟て法門發展の私ならざることを證するのてある。

（內證相承又は塔中相承）

- 久遠實成釋迦牟尼佛
  - 迹佛
    - 三世の諸佛
    - 十方分身
  - 塔中別付本化上首上行菩薩
    - 迹化の菩薩
      - 文殊
      - 彌勒
      - 藥王
      - 普賢
      - 觀音
      - 其の他
    - 他方來の菩薩
      - 南岳
      - 天台
      - 傳敎
      - 聖德
  - 末法應識日蓮大聖人

即ち純法華經の相承てある、（天台も傳敎も時機を將護するため、法華經の外に他經を兼用した

參考

（外用相承又は塔外相承とも三國四師の相承とも云ふ）

- 釋迦牟尼佛（印度）
  - 龍樹—慧文—南岳
- 天台大師（支那）
  - 寧安—妙樂
    - 道邃
    - 行滿
- 傳敎大師（日本）
- 日蓮聖人（日本）

から、これを「以偏助圓」の化導と稱して純法華經でないものとするのである）事件の相續でなくて、血統の一段であるから、他血を混ずることは出來ない、本佛は法界の全部を法華經化した行者で、本化は一たび法華經の全部を人間化した行者である、法華經を人間化したのは、やがて人間を法華經化するためである、釋尊と本化とは表裏を相成して、齊しく純法華經的である、天台傳敎はこの間に立ッて、理義的に疏通を計ッたのである、たとへば本佛は「天照大神」の如く、上行菩薩は天孫「瓊々杵尊」の如く、日蓮上人は「神武天皇」の如く、法華經の要法は「天鏡」の如く、法華經の法門は「八阪瓊曲珠」の如く、法華經の修行は「天叢雲劍」のようなものである。

乃で法華經の色讀とは、どんな事かといふと、一口にいへば眞理を血と骨で顯はすことである、法華經の一念三千といふ法門は、森羅三千の法界は、我が一念の顯はれた姿であッて、法界の全體が即自身であるといふことだから、これを理論で示すのは、心の體を說き、事物の性質を究めて、理義の上から、その一體なることを論證して行かねばならぬ、いくら一つだと言

ッても、眼前の事實は我と世界とは別に在るのであるから、それの別體でないことを驗らめるには、その無形の方面に論據を据えて、物體質碍を超絕した純靈界の上で融即して居ることを明かすのである、それに付ては、種々雜多なる疑問旁障を闢いて、論じ詰め詮じ究めて、これより外に持ッて行きどころが無いといふまでの道理を經てゞなければ、眞理の全面影を顯はすことは出來ない、かくして法華經を開示するのを「理觀」の法門といふのである、「理の一念三千」ともいふ、然るに人の理性といふものは、眞理それ自身でありながら、第二性の迷妄心が全盛を極めて居るのだから、抽象的に眞理を會得するといふことは、百のものが九十九までの疑問（眞理を疑ふ心）を打破らない內は、半分で通用するといふわけに行かない、恰かも一圓紙幣を半分に截ッて、之を五十錢に通用させるといふわけに行かないようなものである、トいふものは、元來紙幣そのものは紙であッて正貨でない、これが金貨と同じ資格に通用するといふのは、無形の約束が籠ッて居るからである、然るに金貨はどうかといふと、半分にしても十分一にしても、金は金だけの價値が、いつもその物體に存して居る、法華經の眞理を理性の方面

から發揮しようといふことは、餘程上根なものが、極めてのんきな世に居てやるのでなければ、今の世の中の樣な、繁雜混亂の中ではトテモ滿足な結果は見られない、若し學問として思考推求するのなら、却て今の方が花が咲くであらうが、理觀で修行を立てるといふのは六ケ敷いのである、然るに之を理性力に訴へず、直ちに實地に行ッて、具體的に眞理の全面影を發揮するといふ弘敎法は、本化の敎として、末法時機相應の修行なるのみならず、佛敎本來の持前も全くこゝに在るのである、言ふのは第二義で、行ふのは第一義である、天地日月は一言も物はいはないが、常に間斷なく道を行ッて居る、所謂『天何をか言ふや四時行はれ百物生ず』と孔子の言はれたのも此意味である、日蓮上人の法華經弘通は、法華妙理の全部を身で行ひ顯はしたので、これを「事觀」とも、「事の一念三千」ともいふのである。

法華經は人生の實際問題であるとして、卑いと見て居た人間界、穢土と見て居た此娑婆世界が、直に本佛の淨土であるといふことは日蓮上人が一生六十年の行實に於て顯はれたのである、正法弘通の爲めに、限りなく迫害を受け、『この日本國六十餘州島二つの中に日蓮が五尺の身の置き所なし』とまでの大艱難を、眞理正法の爲めに受けたといふことは、偶然の出來ごとでなくて、始めより眞理の光顯であッたのである、即ち眞理と反眞理者との衝突であッたのである、四箇の大難は、三度の死諫から來たのであるから、國家を諫めるといふことが、即ち眞理の發動であッたので、此場合に於ける國家人生は、直ちに眞理の依地である、天下を治める人事を整へるといふことは、即ち眞理の回復である、十萬億土の佛法でない、娑婆世界の佛法である、佛の佛法でなくて人間の佛法である、人間の爲めにとて說き殘された佛法である、山中の佛法でなくて、聚落城邑の佛法である、理論空想の佛法でなくて、處世實際の佛法である、文字の佛法でなくて生身の佛法である、『末法に法華經を弘めると怨嫉が多い』と經文に說いてある、果して日蓮上人には怨嫉が多かッた、『正直に法華經を弘めると三類の强敵に迫害される』と經文に說いてある、果して日蓮上人は迫害に遭ッた、『罵詈』せられると說てある、果して罵詈された、『打擲刄傷される』と說てある、果して打たれた斬られた、『處を逐はれる』と說てある、果して遠島された、それも『數々』と說てある、果して伊豆に流され佐渡に流され、其外處を追

はるゝこと二十餘度であッた、法華經は末法後五百歳に弘まると說てある、果して日蓮上人の出現は後五百歳であッた、『天竺より東北にあたる小國に純法華經の種子が發生する』と記せられてある、果して日蓮上人の出現した日本は東北の小國であッた、法華經が眞理の全編である、なら、その記述傳說は、すべて眞理發展の豫言である、上人は生誕の首めより入滅の後りに至るまで、一生涯の一言一行すべて法華經の活きて現はれたのである、身を死ろし天下を救はうといふ事業、即ち慈悲であると共に、又大なる智慧である、物好や名譽の爲めに働いたのではない、それが即ち法華經の法門である、法界は同一體であるといふ事實を、最高道義で顯はしたのである、即ち一念三千を口で述べないで、身で述べたのである、

余に三度の高名あり、一には去る文應元年(太歳庚申)七月十六日に立正安國論を最明寺殿に奏したてまつりし時宿屋の入道に向て云く、禪宗と念佛宗とを失ひ給ふべしと申させ給へ、此事を御用なきならば此一門より事起りて他國にせめられさせ給ふべし、二には去る文永八年九月十二日申の時に平左衛門尉に向て云く、日蓮は日本國の棟梁也、予を失ふは日本國の柱梁を倒す也、只今に自界叛逆難とて同志討し、他國侵逼難とて此國の人々打殺さるゝのみならず、多く生捕にせらるべし、建長寺・壽福寺・極樂寺・大佛・長樂寺等の一切の念佛者・禪僧等が寺塔をばやきはらひて、彼等が頸をゆゐの濱にてきらずば、日本國必ずほろぶべしと申し了んぬ、第三には去年四月八日に左衛門尉に謂て云く、王地に生れたれば身をば隨へられ奉るやうなれども心をば隨へられたてまつるべからず、念佛の無間獄、禪の天魔の所爲なる事は疑なし、殊に眞言宗が此國土の大なるわざはひにては候なり、大蒙古を調伏せん事、眞言師には仰付けらるべからず、若大事を眞言師調伏するならば、彌々いそいで此國亡ぶべしと申せしかば、粗綱問ふて云く、いつ頃よせ候べき、予云く經文にはいつとはみえ候はねども天の御氣色いかり少なからず念にみえて候、よも今年は過し候はじと申したりき、此三の大事は日蓮が申したるには非ず、只偏に釋迦如來の御神我身に入かはらせ給ひけるにや、我身ながら悅び身にあまる、法華經の一念三千と申す大事の法門はこれなり。(撰時抄)

天下を諫めたといふ事が、直ちに一念三千の成佛だといふ安心であるから、それが爲めにいかなる迫害をうけても、動かず怖れず恨まず憤らず、逍遙として大安樂地に遊ぶの念ひを爲して居るのである、時ありて面てに憤悖の容を示すのは、咸敎への爲めである、上人の安心は『法難の來るを以て安樂行と心得べし』といふに在る、故に弘長元年五月伊豆へ流罪された時には、お蔭で間斷なき唱題の行者となッたと歡ばれて、是れ國主の恩なりとして『四恩抄』を艸せ

られた、

去年の五月十二日より今年正月十六日に至まて二百四十餘日の程は、晝夜十二時に法華經を修行し奉ると存じ候、其故は法華經の故にかゝる身となりて候へば、行住坐臥に法華經を讀み行ずるにてこそ候へ、人間に生を受けて是程の悦は何事か候べき、凡夫の習我とはげみて菩提心を發して後生を願ふといへども、自ら思出し十二時の間に一時二時こそははげみ候へ、是は思ひ出さぬにも御經をよみ讀まざるにも法華經を行ずるにて候か、無量劫の間六道四生を輪回し候ひけるには、或は謀叛をおこし強盜夜打等の罪にてこそ、國主より禁たも蒙り流罪死罪にも行はれ候らめ、是は法華經を弘むるかと思ふ心の強盛なりしに依て、惡業の衆生に讒言せられてかゝる身になりて候へば、定て後生の勤にはなりなんと覺え候、是ほどの心ならぬ晝夜十二時の法華經の持經者は、末代には有がたくこそ候らめ、又止事なくめてたき事侍り、無量劫の間六道に曲り候るには、多くの國主に生れ値ひ奉て、或は寵愛の大臣關白等ともなり候けん、若爾者國を給はり財寶官祿の恩を蒙りけるか、法華經流布の國主に値ひ奉り、其國にて法華經の御名を聞て修行し、是を行じて讒言か蒙り、流罪に行はれまゐらせて候國主には未だ値ひまゐらせ候はぬ歟、法華經に云く「是法華經は無量の國中に於て乃至名字をも聞くことを得べからず、何に況や見ることを得て受持し讀誦せんをや」と云々」されば此讒言の人國主こそ我身には恩深き人にはおはしまし候らめ、（四恩抄）

是れ即ち事に臨んで「色讀の」要義を開宣したのである、又文永八年九月龍口に於て死罪に行はれる時、四條金吾頼基が、途中で上人の馬に追ひ縋りて男泣きに泣いた時に、

いかに不覺の殿原かな、これほどの喜びを笑へかし（種々御振舞抄）

と喝破されたのは、氣を以て勝つの意でなくて、根底深く正しい大安心から出たのである、即ち眞理の聲である。

而してこの「法華經の色讀」といふことは、上人一己の安心として、獨りその光榮を占めるの意でなく、すべての人に皆「色讀」を勸められたのである、

日蓮は明日佐渡國へまかるなり、今夜のさむきに付ても、牢のうちのありさま思ひやられていたはしくこそ候へ、あはれ殿は法華經一部、色心二法共にあそばしたる御身なれば、父母六親一切衆生をもたすけ給べき御身なり、法華經を餘人のよみ候は口ばかり言ばかりは讀めども心は讀まず、心はよめども身によまず、色心二法ともに遊ばされたるこそ貴く候へ、「天諸童子以爲給使、刀杖不加毒不能害」と說れて候へば、別の事はあるべからず、籠をばし出させ給はゞ疾くきた

色心二法とは、身にも心にもといふことである、末法の法華經の修行は、觀念觀法坐禪工夫な

ど手綴いことではならぬ、單刀直入實地的に眞理の大活動でなくてはならぬ、末法は繁紛の世である、人は繁紛の爲めに退轉するのである、眞理は極めて簡短明了なるものである、簡短の中に天地のすべての力を收めて居るのである、學問や理窟はつまりその眷屬である、されば吾等の法華經修行といふことに就ても、この「色讀」を以て、眞理と人生とを一貫すべく安心して行かねばならぬ。（詳しくは第三編を見よ）

五　法界唯一乘の妙義

本佛釋尊の宣言によりて、『十方佛土の中には唯一乘の法のみありて二もなく亦三もなし』と決定した上は、佛敎の主義がいくつも有るの、釋尊の本懷がいくつも有るのといふことは無い筈である、隨て世の人々の安心歸着する所も一つでなければならぬ。

法界は本と同一體で、脉絡機關が融通統一して居る一つの大なる有機體である、たとへば一人の身體が、局所でいへば、これは頭腦これは足、眼だの耳だの手だの指だのと、種々に別れて居るが、之を統持して居る所の精神は二つないようなもので、大小の異りこそあれ、意味合ひは同じことで、我れの彼れのと隔ッて居るのは、つまり局所の區別であッて、法界といふ一つの大なる身體としては、必ず一の大精神の下に統一されて居るのである、この法界一體の精神が、自己の本分の精神であッて、別々だと考へて居る心は、途中から涌いて來た假性的精神である、この假性的の私心を去ッて、法界一如の公心に還るのが、一念三千の法門である、この公心を失ッて居る今の自己は、やはり假性的の自己であッて、永久不滅の性質を帶びたものでない、眞の自己は常住不滅の壽命を有して、法界を身體とし、法界を心とし、法界を相として居る所の本佛である、これが自己の實體である、その實體へ還元するため、させる爲めに敎法が必要となるのであるから、敎法そのものが歸着所を一二三にするといふ理窟はない、必ず法界の實相眞性本體を確指して、二なく三なき唯一乘を票榜して居らねばならぬ、若し爾うでないと、人の精神が區々になッて理りがつかない、二つも三つも目的が示されてあると、遂にその比較の爲めに、一方には疑惑となり、一方には諍ひとなッて、安心を得べき敎法が却て人心

を惡化し愚化するようになッて了うから、眞に社會を救はうといふには、先づこの法界唯一乘の主意に背ッた誤りの教法理義は、悉くこれを打破ッて了はねばならぬ。

法界一體の大安心が、社會人心の根抵とならない間は、決して眞の智慧も道德も發生しない法界が一つものだといふ眞境に到達せずして、神だの愛だの慈悲だの忠孝だのと、いくら理窟づめに責めても、その宗教道德は、假性の理が假性の心に植ゑられたのであるから、譬へば栽枝の花を灰の中へ挿したようなもので、花それ自身も永久の質を有ッて居ないところへ、灰が水分を含まないから、ホンの瞬間のながめに過ぎないのである。

一人に精神が二つも三つもあッたならば、そは容易ならぬ精神病であらう、一體の法界に道がいくつも有る道理のないのに、種々さまざまの宗教や理窟が、算を案して吾等の前を遮り左右を塞げて居るといふことは、人間に取ッて此上もなき禍であるといはねばならぬ、釋尊があんなに心配をなされて、『道は必ず一つであるぞ、我が本懷はその一つの無上道に在るぞ、我が滅後に佛道を行ずるものは、ゆめ此教誡を忘るなよ』と、重々に念を入れての御遺誡があッた

にも拘はらず、二道三道八宗九宗、思ひ思ひに門戸を構へて、いづれが眞の佛法やら、殆ど歸着に迷ふ光景となッて了ッたのである、法界唯一乘の大猷を發揮するには、必ず先づこの區々の見計を撥ひ除かねばならぬ、こゝに於て大慈折伏の義軍を興す必要を生じたのである。

この邪見は、佛在世から發生して居た、法華經の會座にもあッた、所謂「五千起去」「人天被移」の類である、佛の滅後に於ては、小乘と大乘との諍論より始まッて、後には大乘の中に、空宗有宗の諍ひが、印度で發生した、支那では南三北七を始め、華嚴、天台、三論、法相、淨土、眞言等の諸大門流、おの〳〵闌菊の美を競ッて、諍論の規摸も中々に大きく、通常の人には口嘴の容れようもないほどに六ヶ敷く絆れ出して來た、日本は佛教の仕上げ場だけあッて、印度支那の大昔からの諍論が、殘りなく渡ッて、肝心の本國では跡形が亡くなッて了ッた時分に、各方面の諍論が、あちらにも、こちらにもと崩え出して、中々の壯觀盛況である、たとへば眞言では善無畏、不空、金剛智、よりも出藍た弘法大師が出る、淨土では、曇鸞、道綽、善導、よりも出藍た法然上人が出る、天台では四明、淨覺、志盤、よりも卓絶した安然、慧心、

覺運、證眞が出た、三國の宗見學見は殘りなく日本に傳來發達して、揉みに揉んだ結果、議論の花が喧嘩に咲いて、坊さんが武器を執るまでに及んだ、南都では興福寺東大寺等、いづれも少きは十萬石、多きは三十萬石の大名ほどの兵力があッた、叡山、三井寺、高野、根來、熊野、清水、其他諸國の大山巨刹には、いづれも僧兵があッて、其威勢は王侯を壓するほどに、戰爭までも強かッた、支那でも天竺でも、これまでには發達しなかッたのである、坊さんの癖に戰爭をするのは全く墮落であると、一口には言ひ貶せない、その最初は佛法護持に熱心のあまりと、法義論諍の強盛であッた結果、干戈を執ッてまでも、自派の主張を貫かうといふより來ッたのである、(仕舞には手間取りに雇れて戰爭を商買とするようになッたけれども、)その結果を見て、その原因に溯れば、この佛敎內の論諍といふものが、我見を本とした妄想邪思惟から生じたものであるといふことが解る、この弊に堪えずして、空想空論の範圍を脫し、實際的傾向に出て、端的の化導を開かうといふ考から崛起したのが、念佛宗と禪宗の勃興で、何でも從來の固執して居た葛藤紛亂の外に出て、超絕した新しい票準から、一般の民心を收攬せねばならぬといふので、念佛では彌陀の本願の外、何ものも要らないと立て、禪では敎外別傳だから、經文の議論などは夢中の譫語であると喝破して、佛敎の場面に一の新局面を開いた、天台眞言等の舊宗は臥こかしにされて、山の中へ置いてさぼりを喰はせ、通俗の人情を支配して、念佛は婦人的家庭的平民的の安心となり、禪宗は武人的瓢逸的經濟的の安心となり、この二潮流が世間を捲て、こゝに新しい變形の佛敎主義が出來た、念佛主義はこの土を穢として、西方極樂淨土へ往生するといふ主義だから、此敎からは一種の厭世主義が生れ出て、捨鉢趣味の安心で、兎も角も亂世の人情を痲醉させた、禪宗は「敎外別傳」で、佛說を無視し、「見性成佛」で自分が佛だといふ主義を皷吹したので、此敎からは、君臣の秩序を破壞し、人生の節度を無視した北條氏のような個人主義が發生した、矢叫び血煙りの慘景こそないが、流毒深く人心に入ッて佛敎の綱紀は世道の壞亂と共に支離滅裂に歸した、天台眞言前に興り、念佛禪宗後に昌えた吾日本の佛敎歷史は、國こそ小いが、實に紛議葛藤の委曲を盡したものである、亂れの極は即ち巧みの極である、發生すべきほどの議論見計は既に業に遺憾なく發生し畢ッたのである、これ

からは溯ッて三國二千年の紛諍から、現在の葛藤、乃至幾千歳の後までも、モーこれで決着といふ、大々的判決を下して、この支離滅裂して適從する所を失ッた佛敎諸宗の始末を着けねばならぬ、功は功で錄し、罪は罪で責めねばならぬ、純法華經の化導時代に到達するまでは、勿論法華經已外の餘の深法の中に於て示敎利喜するといふは、應機の化導として、その功を認むべきものである、若し過去に功があッたからといふて、猶純法華經時代たる末法に迄留存して、法華經化益の範圍を侵すといふに至ッて罪となるのである、況して法華經を度外しての宗見を主張するに於て、その罪惡は一層重大のものとなるのである。

已に出でたる三國二千餘年の紛論、現に行れつゝある、將た後に起らんとする迷見邪計、色こそ變れ形こそ違へ、法界唯一乘の大眞理を度外するといふ點に於て一致した、反逆的系統に屬したものである、既に在るは之を撲滅すべく、後に生ぜんとするは之を豫防すべく、ベストを菌を驅除するが如くに、之を掃絶して了はねばならぬ、そうでなければ人の眞理に合すべき健全なる思想觀念を腐らせて了うの虞れがある、のみならず、この亦二亦三主義を許さぬといふ主義でもッて、法界唯一乘の大義は票榜せられるのである、即ち大義名分の表示として、旗色を鮮明にしなければならぬ。

畢竟亦二亦三の見計が、宗見となッて現はれる背後には、必ず之を助長すべき學見が伴ッて居る、これをも破らねばならぬ、即ち「附佛法成の外道」「學佛法成の外道」といふて、佛敎を學びながら圖らずも外道の見に墮したのである、即ち妄想邪謂の致す所で、種々なる理論道德の裝飾を施して人目を眩惑するから、人は之を眞理正道と誤ッて、不測な禍害を釀し成すのである、「世間の罪惡によッて惡道に墮つるよりも、佛敎の誤りによッて惡道に墮つる方が多い」と誡められたのは乃點である。

『念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊、諸宗無得道墮地獄の根元、法華經獨り成佛の法なり』と叫び、嘉祥、慈恩、澄觀、善無畏、金剛智、不空、達磨、慈覺、智證、弘法、法然等を謗法邪人と詞し、良觀、道隆等の鎌倉七大寺の高僧碩德を國賊と責め、武斷猛烈にして天子をも凌ぎたる北條氏を逆賊反叛のものと痛擊し、時賴重時を地獄の罪人と彈じ、時宗を愚物と公言

し、身に寸鐵を帶びずして、天下の威武にも屈せず、擧國の怨嫉にも怯まず、迫害いよ〳〵來れば、志いよ〳〵堅く、法難ます〳〵重なれば、慈念ます〳〵盛んに、四箇の大難、無數の小難に身を湯鑊に投じ、處を逐はれること二十餘度、身に生疵の絶ゆる間がないといふほどの大苦境に立ッて『建長寺壽福寺極樂寺大佛長樂寺等の一切の念佛者禪僧等が寺塔をばやきはらひて、彼等が頸をゆゐの濱にてさらずば、日本國必ずほろぶべし』とまで、大慈熱の勃發するところ、一切の邪見妄計を燒盡せねば已まざるの意氣を以て、諸宗人法の誤りを正されたのは、一時に逗した臨機の激語でなくして、萬代不滅なる眞理の威力を示したものである、撥亂反正の大義を確立した大格言の叫びである、この大破邪によッて、大顯正は來るのである、法界唯一乘の妙義を光揚するといふことは、法界人生のあらゆる何物にも換え難い一大事であるから、人情も身命も犧牲にして、全く新たなる法界を築き出さんばかりの大革命を、從來の佛敎乃至學問等の思想界に加えたのである。

六　思想道德の統一

法界唯一乘の眞相に歸着すれば、人間の目的が一途に決着する筈である、そうなれば世間に諍論の法が亡びて了うから、世は眞の大平和に歸するのである、研鑽の爲に要する秩序ある競爭切磋は、天文地理の運行循環のそれの如くであッて、毫も世の害にならないで、正當なる人文の進步發達となるのであるが、根抵に於て法界圓融の大理想が缺けて居て、見我妄計の謬想が、人情の迷執と打混じて發育した觀念が、人類の思想道德を支配して居るうちは、進めば動けば、悉く爭論衝突の基となッて、有理らしい理窟は、目を衝くほど諸々方々に在るが、最終歸着の大目的が把住せられないから、銘々割據の姿で安心する、それに一つの執着が伴うから、他の主張に接すると衝突する、理を求めながら不明になる、世を思ひながら世が亂れる、ヤレ個人主義、ソレ國家主義、西へ行け、東へ行け、天に上れ、煙になれ、愛だ、忠孝だ、いづれも善良の意思での主張だが、總勘定で差引すると、いつも諍ひだけが殘ッて、究竟の大目

的に安住することが出來ないのが現世間の光景である、畢竟區々の思想が縱横葛藤を極め、道德の票準が一定して無いからである、これが根となッて、人間に不滅の生命がなく、世に究竟の平和がないのである、之を統一して、區々の諍見を斷ッて了はうといふには、圓滿絶大の眞理の下に統一しなければならぬ、即ち法界唯一乘の妙義に依て整理するのでなければ、到底最後の平和は求められない、猶四海一統の實權ある天子にあらざれば、割據の群雄を統一することが出來ない道理である。

七　常寂光明の眞世界

此世が樂い處であると執着した凡夫の見は、正しく謬て居る、それは謬れる樂みを認めての執着であるから、世界をも誤り解したのである、花に戯れ月に浮かれて、無意義の生を貪り樂む淺墓な觀想を打破ッて、眞實の快樂を得せしめようといふのが、佛の本懷であるから、その前提として、一たび此世界を「苦の娑婆」と說いた、それは人の妄想を淘汰する爲めであッて、世界を破毀したのではない、然るに若しこの牽制的の側面誡諭を惡解して、何でも此土は穢土である、厭ふべきものである、永久の安樂は金輪際此土にない、人生は恃むべからざるものだと僻執して、十萬億土だの天上界だのと、空漠たる目的を妄想して、眞の安住地を現實の世界人生以外に求めるのは、全く佛の方便設化を惡解して、佛陀化導の實意を無視した、自暴自棄の惡思想である、無意義に此世を好しと執したのも、惡解的に此世を惡いものと考へたのも、すべて間違である、此世は眞の寂光淨土で、人生は此上もない安樂光明の境界であるといふことを敎へたのが、法華經の眞理、本化妙宗の安心である。

惡いとするも好いとするも、それは觀念次第である、只その觀念が根據を自己の迷想の上に据えて居るか、本佛唱導の正理の上に置いてあるかの違ひで、全く明闇を異にして來るのである、善良なる求道者は、みづから眞理を研究せずして、本佛の所說に隨順して、自己の理性を滿足するのである、換言すれば「佛は直ちに眞理」であるから、佛の所說指導に順ふのは、最も完全なる眞理の奉行である、それでこの世の中を直ちに常寂光土とするのは、この世界を本佛

の土とすることが先決條件である、若し衆生の土とすれば、いつても穢土である、苦の娑婆である、それが吾々の上でも常寂光土となるのは凡夫が即本佛であるといふことが先決條件である、同じ衆生見でも、衆生みづからの衆生見は、あたまで何の考もないのであるから、佛が衆生に成代ッて、衆生的にこの世を觀察して「苦の娑婆」となるのである、それが一旦本佛の境界に還元すれば、蕩然として本佛の自受法樂に同歸して了う、それが常寂光の淨土を感得したのである、經に

今此三界は皆是吾が有なり、其中の衆生は悉く是れ吾が子なり、而も今此處は諸の患難多し、唯我れ一人のみ能く救護をなす（法華經譬喩品）

「而も今此處」とは、衆生見の方でいふ三界で、佛の方でいへば、「多くの安樂あり」といはねばならぬのである、但佛は佛の持前として、この衆生の患難に對しては、いつても「唯我一人能爲救護」の慈悲を施すのである、これは釋尊が吾等の爲めに「主」「師」「親」の三德を備へられた大恩教主であるといふ經文である、（我有は主の德、悉是吾子は親の德、能爲救護は師の德）、救

護の慈悲は佛の作用で、衆生に患ひがあるから發生するのであッて、不思議にも衆生患難は、佛の作用を發揮せしむるので、それがあるから、佛の佛たる所以が解るのである、恰かも病人があるから名醫の手腕は解るのである、若しも世に病人がなくなッたら、醫師の職務がなくなるから、むしろ「病人さま」であるべき筈だが、仁術としての本領から行けば、醫者が要らなくなるようにするのが、名醫の名醫たる所以で、東洞醫師の歌にも『くすしてふ名さへ恥かし今はたゝ人に病ひのなき世ともがな』とあるが如く、佛は衆生の患難を除くのが持前で、つまり安樂地大光明界で、善とも惡とも名のつくような境界を超脱した、眞の大無爲界に自受法樂するのが佛の本懷である、故に經に

如來は如實に三界の相を知見す、生死の若は退若は出あること無く、亦在世及び滅度の者なし、實に非ず虛に非ず、如に非ず異に非ず、三界の三界を見るが如くならず、斯の如きの事、如來明かに見て錯謬あること無し（法華經壽量品）

とあッて、眞の絕對圓滿境であるが、只「教」として人に對して、眞安を對檢て見せなければな

らぬ必要からして、對比して見せて、向上心を促すのである、衆生みづからは、自己の罪惡者たることさへ知らないで、大威張で日夜に罪惡を造りつゝある、隨て自己の受けつゝある、若くは受けんとする苦みさへも知らない、所謂殆ど漫性のアルコール中毒みたような工合である、こゝに於て眞の大安樂地を自覺せしむるには、先づ順序として、凡見の士が大苦境なることを曉らしめ、それと對照して、水際の立つように本佛の淨土を認識せしめて、その最上安樂地を與へたいと云ふのが、佛化導の意匠である、故にその趣を經に

衆生劫盡きて大火に燒るゝと見る時も、我此土は安穩にして天人常に充滿ぜり、園林諸の堂閣種々の寶を以て莊嚴し、寶樹花果多くして衆生の遊樂する所なり、諸天天鼓を擊ッて常に衆の伎樂を作し、曼陀羅華を雨して佛及び大衆に散ず、我淨土は毀れざるに、而も衆は燒け盡きて憂怖諸の苦惱是の如き惡く充滿ぜりと見る、是の諸の罪の衆生は惡業の因緣を以て、阿僧祇劫を過れども三寶の名を聞かず、諸の有る功德を修し、柔和質直なるものは則ち皆我身こゝに在て法を說くと見る、（法華經壽量品）

諸〳〵の罪の衆生でも、一たび柔和質直の心を發して、本佛に隨順すれば、いつても見佛聞法して、本佛の境界に一如安住することが出來る、すでに本佛化すれば、この土やがて常寂光明の眞世界となる、而してこの本佛に同如するのは、理窟でも議論でもない、柔和質直の心、即ち信である、即ち

衆生既に信伏七質直にして意柔輭に、一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず、時に我及び衆僧俱に靈鷲山に出づ、（法華經壽量品）

「質直」とは眞理を奉じて動搖しないこと、「柔輭」とは本佛の正智に隨順して逆はぬことである、「一心」とは雜亂を離れること、「佛を見る」とは本佛と一如することである、「自ら身命を惜まず」とは自己を沒すること、即ち自己の情想執着を捨離することであッて、これが本佛と一つになる第一番の準備である、「俱に靈鷲山に出づ」とは、本佛顯本の靈地を擧げて、本地寂光を顯はしたのである。

「常寂光」といふことは、壞れない燒けない滅しない淨土のことで、「常」とは常住不滅、「寂」とは諸の諍論紛雜を離れて靜かなること、「光」とは無が濕れて明かなること、即ち德でいへば

「法身」「般若」「解脱」の三德である、猶すべての功德光榮の圓滿に具足せられた大安樂大光明の世界といふことである。

常—(法身の德)——(法身如來)——(中諦の理)……仁
寂—(解脱の德)——(應身如來)——(假諦の理)……勇
光—(般若の德)——(報身如來)——(空諦の理)……智

八　閻浮統一の名教

この法華經の眞理正道は、西方極樂世界だの、天國だのといふような架空的の世界に在るべき教でなく、特にこの閻浮提の憲教と指定されてある、閻浮提とは、今この吾人が生息して居る全世界といふことで、無限の法界より言へば、ホンの一小部分であるが、教法として施設するのは、所被の衆生が相手だから、その緣を逐ッて教を垂れ行くのである、法華經の內容なる眞理は、勿論法界に滂礴した絕待眞理であるが、その眞理より開出した教法そのものは、特に閻浮提の人を正意とすとある、實際問題としては、先づ吾々は吾々の住んで居る此世の中の處置をつけてかゝりさへすれば可いので、他の世界はどういふ教があッて、どういふ修行安心があるかは、必しも詮索する必要がない、月世界や星の世界では、銘々それ〴〵の教があることであらう、その神髓は法華經の道理を外れて居ない筈だから、いつの世にか交通することが出來て意思言語の互に交換せらるゝ時ともなッたら、終に同一の運命に歸着して、眞理の友として交際することも出來るであらうが、今のところでは、そんな事に氣を揉んで他の疝氣を頭痛に病むには及ばない、それどころでない肝心の自己の始末を付けねばならぬのである、して見れば吾々は無限の眞理を一先づ有限に縮めて、實地應用といふ方面に力を入れねばならぬ、こゝに於てか、法界とか宇宙とかいふ目安を、歷史數量の範圍內に近めて、既に吾々が住んで居るこの地球上の世界を目的に立て、さてこの同一世界に生息する人類は、文野の異りこそあれ、等しく同一人類として、共通した人道の上に立ッて居るのであるが、その思想や宗教や習慣や、歷史等の異りから、この芥子つぶ(無限の法界よりいへば)の如き地上に、いくらも〴〵國が

あッて、やれ人種の軋轢だの、政治經濟の衝突だのと、夢の如き利害の小衝突（汐界大の眞理よりいへば）の爲に、人と人との間だの爭ひ、國と國との爭ひ、鬪諍喧噪絶ゆる時なく、道德も宗教も政治も學問も、無殘や皆この衝突渦中の具となッて、人間最後の仕事はといへば、人を殺すこと國を奪うことより外はない、文明といふのも、詮じ詰れば人を殺すのが上手になッたことをいふに過ぎないのである、かゝる見戯に類した醜態を、既に目の前に控へて居て、これを救う心も道もないとあッては、世にこれほど心細いことはあるまい、幸ひに佛の大慈悲で、外ともいはず此閻浮提に適應した、眞理の調劑たる法華經を、閻浮統一の名教として、末法の今日にとて說き貽されて、且つその佛意の通りに傳へられた本化の大教は、特に名指して此世界人類を救うべく、實際的に建立弘傳せられたのである、これを經に說て、

此經は則ち爲れ閻浮提の人の病の良藥なり、若し人病あらんに是經を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならん、（法華經藥王菩薩本事品）

「閻浮提の人」の良藥とあるから、取敢へず特効藥として用ゐねばならぬ、又

閻浮提の內に廣く流布せしめて斷絕せざらしめん、（法華經普賢菩薩勸發品）

「閻浮提の內」とあるから、外の世界には一寸も關係がないのであらう、たとひ有ッても、それは閻浮提人たる吾々の詮議すべき所でない、吾々はこの現世界といふ最も親しき同胞の境界を整理すれば可いのである、要は閻浮提の地續きに住ッて、同一の天日を戴いて居るものだけは、何事を置いても、天の同じさが如く、地の一つなるが如く、人も一つでなければならぬ、これが一つでないから、いろ〳〵の葛藤苦情が起り、戰爭殺伐が絕えないのである、人間の價値は、身體よりも精神に在るのだから、精神を一つにすれば、それで世界の人間は貫かれて一人となるのである、人間が一つになれば、始めて天地と一貫して、こゝに四海一家の實が擧がるのである、その起點は一人づゝから始めて、その結果は世界同盟に終るのである、その間だに立ッて之を遂行するに、國家といふ力が要るのである。

一閻浮提の人ごとに有智無智をきらはず、一同に他事をすてゝ南無妙法蓮華經と唱ふべし、（報恩抄）

「一天四海皆歸妙法」の大目的を以て、閻浮を統一せずんば已まぬと云ふが、本化妙宗の教旨て

ある。

本化妙宗の主義は、その淵源遠く釋迦如來より出て、その教澤は末法濁惡の世を潤し、特に大日本民族の頭上に天降ッて、世界統一の卒先者たるべく、法爾として先天の約束が備ッて居るので、本化の大教は、この日本國に建設せられた、それは日本の爲めとばかりではない、世界人類の爲めに、この日本に建設せられなのである、即ち日本が世界統一の使命を法華經から囑托されたのである。

區々の宗見學見を統一して、人の歸嚮處を一定するに就ては、いろ〳〵の惑を決し、さまざまの滯りを排はねばならぬ、標準を究めねばならぬ、旌章を鮮明にせねばならぬ、所謂「名教」として、人の心の目安を建てるの必要がある、眞理奉行の契符を定めるのである、名を正し、體を定め、宗を決し、用を辨へ、教を明かにする所の方法として、整々嚴肅なる判釋を經て、的確明了に宗旨を祖述したのである、それは宗教の五綱と、宗旨の三秘とである、その至大公明なる宗教宗旨を名教うして、闇浮統一の願業を貫かとといふのは、日月を掲げて六合を照さ

うといふのと同じてあるから、當然出來るのてある、たゞ雲さへ拂ひ除ければ可いのである、雲とはその眞理を信じない罪障をいふので、若し惑があッて信じないとか、理窟があッて伏せないとかいふものには、そのあらゆる疑網惑障を摑裂粉碎すべき金剛杵として、十二分の研鑽と回顧との餘地を與へるため、開宣せられた三秘五綱の大教義である。

三秘五綱の略解は別に述べるから、名目だけ表出して置く

●五大綱判（宗教の五義とも宗教の五綱ともいふ）

(一) 教……釋尊一代の經教の權實淺深を知て本懷の教を取る
(二) 機……衆生の機根機類を辨へて濁末の機は何なりやを知る
(三) 時……時代時應の進退を究めて末法救護の教法の何なるを知る
(四) 國……國土應應の親疎を攷へて國性相應の大利を興す
(五) 序（教法流布の前後）……教法教義の發展を討ねて最勝決定の正義を建立する

●三大秘法（宗旨の三秘とも宗旨三箇の大事ともいふ）

(一) 本門の本尊　「心」に約して法界の靈元たる本佛の正體を顯示する妙行の正境

(二) 本門の戒壇　「身」に約して法界の靈元たる本佛の妙相を成就する妙行の規律

(三) 本門の題目　「所作」に約して法界の靈元たる本佛の正智を發揮する妙行の力用

以上の「教判」「宗旨」に就ては『妙宗大意』第三四兩篇を見よ

宗綱提要畢

法華經叢談

田中智學居士述

法華經叢談

田中智學述

○法華三昧

法華經を何だとおもふ？　只のお經だと想ふと違う、只のお經とは眞理の一部を說て或る一部の迷情を淘汰せんための隨他意經のことである、法華經は全く之れと異ッて居る。どう異ッて居るかといふと、法華經は敎意を明かした經であッて、其他の經は敎意を明かして無い、敎意とは說經の趣意である、化導の始末である、目的である。

敎意は即ち佛意なりとあッて、佛の本懷といふことである、敎へる法があッても敎へる本意が明かして無いのは都て非本懷の經敎である、法華經以外の經はそれだ。

然るに此分別を等閑にして、經敎はいづれも同類同等のものだと考へて居るのは瓦も玉も同

じだ君も臣も同じだといふ類て、物の間違始まり人間の迷ひ始まりが乃點だ。

それほどの違があればこそだ、佛はみづから法華經と他經とを同じに見てはならない、大小の差、淺深の別、どうして夫どころでは無い、全く出所が違うのだと仰せられて、之を混合するものは我が敵だと斷ッてある。

一切經の中の法華經だと考へて居ては、いつまても此謬想が拔けない、宜しく法華經の一切經だと考へるが可い、尤も別段催促されないでも、能く法華經を讀んだものは、其の理が疾く曉て居なければならンのだ、ところが任慂ものかそれが曉らないやうだ。

これが曉らないては佛敎が曉らない、佛敎が曉らないては佛法を知ることが出來ない、佛法を知らなければ佛道を行ずることが出來ない、佛道を行じなければ迷を轉ずることが出來ない佛に成ることが出來ない、佛に成ることが出來なければ世を救ふことが出來ない、世を救ふことが出來なければ宗敎の用を爲さない、人類を高明正大にすることも、萬物をして各々その所を得せしむることも出來ない。

八萬四千の法門、一代五十年の說法、五千七千の經敎、三藏十二部の敎詮、廣い多いと言ッて誇るのか、大きいからと言ッて誇るのか、廣くても淺かッたらどうする、大きくても粗末であッたらどうする、『大男總躬に智慧がまはりかね』では格別自慢にもなるまい、今の世の多くが認めて居る佛敎といふものは、此だらしの無い山出し佛敎のことだ。

身體には腦があッて全軀を支配して居る、國には中央政府があッて一國を統御して居る、いくら大きな身體でも頸なしでは仕方があるまい、いくら大國でも無政府であッたら仕方があるまい、一代佛經にも首腦がある筈だ、中央政府がある筈だ、立派に有るのだ、只知らないのだ、認めないのだ。

一代佛敎の首腦は法華經である、中央政府は法華經である、それは釋迦如來の自判自證であるから、今さら何とも拒めないのだ、唯此上は何故に法華經が首腦である中央政府であるといふことを研究するのが、吾人が佛敎に對する如法研鑽の順序である。

深く研究すれば、一から百まで其の然る所以を證據立て居るが、差當り明著なのが權實と本

迹の法門である、「權實」とは佛教に『權』（方便のこと）と『實』との異目あることを判ずる解式て、「本迹」とは佛の出所來歷を打開て垂教布化の元意を明す法門である。

權實判は二乘作佛の法門から生じ、本迹判は久遠實成の法門から生ずるので、此二判は一代佛教の成敗進退を罄して、まだ其上に、釋迦以外の、佛から菩薩から聖人から賢人から現在あるとあらゆる、經教はいふに及ばず、過去の過去際より未來の未來際に至るまで、いつの世いかなる聖賢の言論德行智慧功業でも、すべて其の本地根源あることを說て、此本地實際に基いて建てば、何でも建ち、若し此本地實際に外れて建んとすれば、何でも壞れて仕舞うといふ道理を說いたのが、此權實本迹の法門といふのだ。

權教と實教とがある、これは權これは實と分ければ、權實各々その所を得るのである、既にこれを分けたらば權は實の爲めのものでないといふことを心得なければ、折角その所を得た權も實も、共に相損じ、相傷ッて虻蜂とらずになッて仕舞う。

たとひ明かに權實を分けても、それを說いた佛の奧の手を知らなければ、實も亦一種の權に

墮ちて仕舞う、佛の極意を明かさないで佛の言語の上の權實ばかりを忖度したのでは、權實ともに眞の究竟と謂はれない、乃で今度は權實を縱に說いたのが本迹の法門である。

此兩柄を持して一代諸經幷に一切の宗教學問に君臨して居るのが法華經である、法華經の上から見れば、何の經でも何の道でも、悉く部分的有用のものである、少しも破るべきもの捨つべきものは無い、すべて莊嚴である道具である、宛も君主の上からは一視同仁で、百官百僚皆おの〳〵用あり百姓萬民皆すべて赤子の如きものであると同じく、破るどころでは無い、すべて保護助長しなければならん、之を法華經の大建立門といふ。

然るに若し此本末を誤り主體を失して、小を以て大を打ち、權を以て實を侵して、同等であると考へたり、權小が實大より勝れて居ると執した場合にはどうであらう、帝王も臣民も同一人類であるからと謂て、その分限を滅却したり又は臣として君を凌いだなら、國家の秩序は直ちに破れて仕舞う、此場合に於ては、何事を含ても、此大不廷を征伐しなければならぬのである、是れは君主の安全を計るばかりの必要ではなくて、亦國家の安寧秩序を保つ上に於ても最

大必要であるのだ、天に二日なく國に二王なし、經教千萬なれども宗とするところは必ず一つてなければならぬ、人々の定めた宗ではなくて佛の定めた宗だ、佛は法華經を宗とした、さらば法華經が佛教の大宗である、經王である、中央主權の府である、之れを混亂し侵害するものは、佛教の保護の爲めに、亦その秩序の爲めに、其混亂侵害の僭僞簒奪を破折せねばならぬ、之を法華經の大破壞門といふ。

邦道あれば禮樂征伐天子より出で、邦道なければ禮樂征伐諸侯より出づと曰ふてあるだらう、今日の佛教はどうだ、古來、涅槃公爵、華嚴侯爵、般若伯爵、毘廬舍那子爵、阿彌陀男爵などの諸侯が僭越して驕恣に經王を凌ぐばかりでなく、洋教だの哲學だの科學だのゝ外寇があッて、まだ其上に和製の高襟黨、一夜づくりの撥鬢者流などの野武士浪人もあれば、自由討究、陽佛陰外などの內應者流もあッて、君王蒙塵四海鼎沸、枯骨山野に充ち、血は涿鹿の野を浸す、鬼啾凄然の光景、『禮樂征伐書生より出づ』と聞いたら、古人も茫然自失するであらう。

無政府の國家、秩序の破れた天下、之が要する最大急務は何だ、學校の普請や書物の虫干で

もあるまい、萬事を捨置て先づ秩序の回復を謀らなければなるまい、今の佛教は支那の無秩序無政府のそれよりもひどいのだ、魯西亞が八方に在ッて、西太后が百人も居るのだ、餘ほどの大奮發を興して護持正法の信念を固めなければならんのである、卓然たる堅操を持して王師に從軍しなければならんのである。

吾々は軍師ではない、大將ではない、軍師は祖師だ、大將も祖師だ、吾々は良卒となるのだ軍夫となるのだ、英將の下に弱卒なしと往けば佳いのだ、言論は陸軍で筆は海軍だ、どちらからでも般んに責めて攻めて、經王の軍威を振はなければならん。

必ず勝うと思ふに及ばない、作戰計畫は既に勝つべく出來て居る、勝てるの勝てないのといふのは兵卒のいふことでは無い、兵卒は大將の命令さへ守れば夫れで可いのだ、これが兵卒の本分だ、吾々は祖師が智でも愚でも、もう爾んなことは問はない、唯祖師の命令に服從するより外に身も心も無い、活きてもの自分が活きてるのでは無い、死んでも自分が死ぬと思はない、倒れて後やむと人はいふけれども、吾々は倒れてもやまない、唯常に恒に法華經の爲めに死に

たいとおもふのだ。

常に法華經のために死んだら、それが臨終正念の不斷相續である、正念は即ち正信の現象狀態である、信念若し法に一如すれば、吾身は即法華經である、吾れ即法華經ならば、吾れは天地法界の本主である、萬物われに備ッて活殺自在の境界である、破壞するも建立するも都て吾が掌中にある、權實も本迹もすべて一身の關節肢能である、權實本迹蕩然として吾身上の活日記となッた、劍も飴の如く敵も吾兒の如く、逆即是順の敎意、怨親平等の慈眼、一視同仁の恩、王者無外の化、內に融妙の文治あッて、外に秩序の武備を有し、心に同情の血があッて、眼に甘露の涙がある、之を法華三昧の大安心といふのである。

附記　『法華三昧』といふ語は、法華經の修行に屬した名であるが、一轉して法華經の證悟とも言ひ得るのである、『三昧』といふとは梵語であッて、心を專注して其法の融合する用意及び行法を總稱した名であるから、法華三昧といへば、法華經の專念行法といふことて、やがては智慧といふ意味にもなる、要するに智慧も德も一心を凝らしてゞなくては出ないのである、世に一事に專注することを何々三昧（茶の湯三昧とか詩三昧とかいふ類）といふのも專心集中をいふのである。

○法華經の文字

法華經は荒唐無稽の談が多い、いかにも非科學的の甚しきものであッて、例へば

此世界の大地が震裂して、無量千萬億の菩薩が、一時に地中より涌出した

とか又は

五百由旬の寶塔が東方の寶淨世界から來現した

とか又は

十方分身の釋迦牟尼佛が、幾人となく此娑婆世界に聚ッた時に、此世界が狹かッたので、八方各々二百萬億那由陀の國土を變じて黃金琉璃の淨土とした

とか、それは〳〵停度のない大法螺が並べてあッて、神怪奇蹟むしろ荒唐に過ぎたものである、こんなものを以て、當世科學的智識の人士を動かそうとするのは、隻手を以て大山を動かすよりも難い、天台大師などが洪瀾なる注釋によりて勿體をつけて見ても、實物がそんな價値

のあるものでない、その信仰崇用は過去の一夢であッて、當今の宗教經典としては、何等功能のないものである……と、是れ方今の大學者某博士の説であるとの事だが、これは眞面目の觀察だらうか、或は何かの間違ではあるまいか、苟くも博士とでも謂はれるものが、まさかに爾る淺薄のことも謂ふまい。

なに、某博士にかぎらず、一般がさう考へて居るといふか、それは捨て置かれない、ては一つ話さう、荒唐無稽の話などゝいふことは、つまり事實を附會したとか、過大にしたとかいふことで、有りさうなことの實に過ぎたものをいふので、法華經の談話は、全く事實を超絶して居るのだ、事實の中のどうかうでなくて事實以上の談であるから、全く人間界の思慮に絶した事柄である、神話だの奇蹟談だのといふ、そんなケチくさいものでなく、全く神靈界の談道である、事實に寓托した靈妙の法門である。

事が大き過ぎやうが小さ過ぎやうが、尺度の秤量で鼻を衝くやうな物質的比量には、何等會釋する所がない、三千世界が幾億萬倍に擴がらうが、大地が裂けて無量千萬億の菩薩が出て來

ようが、八年の間に世界が二度も破れるほどの大地震があらうが、靈鷲山の面積に幾億萬倍の寶塔や人數が居並ばうが、一食頃に五十小劫の長年月を經過しやうが、更らに不思議がるに及ばない、否といふなら、試みに心の寸法を算し出して見るが可い、一彈指頃に世界を周遊して餘裕のあるのは、超物質の靈能ではないか、經文の舞臺は、一に神靈界の上に立ッて居るのだから、物質的計量の差排を容るさない、此意味に於て大談高説いよ〳〵高大にして、まずまず談道の妙を知ることが出來るのである。

天台大師が法華經を講ずるに就て、『因緣』、『約敎』、『本迹』、『觀心』の四釋を具へて、それらの惑を豫め解いてある、彼是れの議を挾むもの、一體全體どれほど經釋を翫味し得て、ぐづぐづ言ふのだか、年月なら凡そ何十年考へた揚句の斷案なのだ、まア法華經を何遍讀んだ、論釋をいかほどまで講究しての批判だ、我肱三折の玄談をば、新聞雜誌の讀過と同じさ拾讀み拾ひ讀みの、ゴソクサイで、臆面なしの輕評は、虫がよすぎるではないか。

成る程文字の通りに、皮相的解釋を以て、法華經の事談を扱ッたら、世界無類の妖怪咄して

あらう、けれども文字には一種の生命がある、『文』の持しつゝある『義』といふのがそれだ、『義』の含有して居る『意』は、魂中の精である、文、義、意、この三は猶皮肉骨の三が身體に於けると同樣である、皮の上から肉も骨も見えないが、さりとて皮ばかりで活きて居るとは、よも謂はれまい、經文を見ても、その事實的構成の下に、何等の義意を詮し出して在るかを考へることもなく、只々呑氣千萬に文字の通りに淺解して、その土中に含める鑛物を探がす量見がなければ、お經は扨置き、詩歌一つも滿足には味得することも出來まい、『白髮三千丈』と聞いて算盤を擔ぎ出し、『溪聲廣長舌』と聞いて蓍音機を持出すやうな、おめてたい振舞を演じ兼ねないとも謂へまい。

文字の相を離れて後、文字の妙は知れるのである、『文に隨て義を取るは三世諸佛の怨』ぞと如來は誡めてある、『法華經の文字はあれども衆生の病の藥とはならず』と祖師は斷定を下してある、今の科學先生よりも、佛祖の方が先刻承知で、そこに如才はないのである、法華經の文字を否定したのは同じでも、義の爲めに文を排したのと、義を覓ひ得ずに放擲したのとの碩異

があッて、迷悟智愚の分は定まるのである、『餘經も法華經も詮なし』との祖判も、それらの用意を述べたのである、文字皮相の淺見で看取した法華經は、何の益をも爲さぬぞといふ訓である、義意の潛鑛を探り當てればこそ『是好良藥の法華經』となり、『病即消滅』の大能力があると定められて、末法應時の正敎とせられたのだ。

方今の學問ある人を動かし得まいとは、齒齦の浮くほど聞苦しき輕佻の言ではないか、今の人間がどれほどの學問がある、否いかほどの思考力がある、算盤で詩を解釋しようといふやうな手際で、いろはがるた一つ正當に解し得るか、西洋人ばかりが智慧の問屋でゝもあるかのやうに心得て、物質的智識以外、幼稚なる哲學宗敎で飽滿して居る、淺露な頭腦では、靈智界の門墻だも窺ふことは出來まい、そんな仕人の安智慧で、學問呼ばゝりも嗚呼がましいといふべきである。

多くの人が、法華經を讀んで、天台大師ほどに正解を得なかッたやうに、天台の敎判も矢張多くの人に正解されずに仕舞ッた、現に天台大師を祖師として居る天台宗ですら、未だに慈覺

智證の惡解を曉らずに居るのである、法華經已後に天台大師ありて、法華經を正解したる如く、天台已後に　聖祖ありて、獨り能く天台を正解した、それはいか樣に解したかといふと、玄義文句止觀の洪瀚なる判說は、只一言の妙法を詮したもので、その材料は醇化した上て用に立つるものだと斷じた、本末六十卷を文相的に否定せられて、それで天台荆溪は活きたのである、溯ッては法華經も爾うてある、觀心の一重に宗敎的根據を据えて、それを事行の上に移したのが、南無妙法蓮華經である。

日蓮聖祖の上で、法華經〳〵といはれるのは、所謂ナマの法華經ではない、善く良く烹て煎じて、ランビキに掛けた精なるもので、前にいふた義意の法華經である、只の經典崇拜と一般に考へては大違である、只の法華經は、旣に『法華經の文字はあれども衆生の病の藥とはならず』と大斷されてある、法華經主義の日蓮上人から此言を聞くのは、不思議なほどであらう、けれども人の見た法華經と、日蓮上人が取られた法華經とは、全く違うのだから、仕方がない、題目といふから經の名だと考へると違う、『名にあらず體なり體とは心なり』とも、又『妙法蓮

華經の五字は經文にあらず其義にあらず一部の心なり』とも判ぜられてある、即ち法華經の生命である、それが說明の料として、彼の妖怪話のやうな事談は入用となるのである、佛意の玄理を組織するのに、二十八品の說相を以てしたのである、何よりもまア善く學んで見てから何かいふがよからう、嚼んで見ないうちは味がわかる筈がないから。

予は斷言して置く、西洋人でも日本人でも今に種々の理屈に厭きが來ると、そろ〳〵佛經に趣味を感ずる時節が到來するであらう、其上で一ト驚きも二タ驚きもしての後でなければ、法華經の義意に幾許の價ありやは判るまい、けだし世界最後の文明思想が法華經に潛みてあるので、今では時節が早いのかも知れぬが、取敢ず氣の注たものが因緣の良いのである、解らぬ乍らも疾くより大法寶を信受して安心して居る者は、封の儘至寶を受取ッたのである。

法華經の文字は、すべての點に於て世界第一の精華ある文學である、されど日蓮聖祖は之を宗敎化して、唱題成佛の妙旨を發揮された、日蓮上人の所謂法華經は即ち醇化せる法華經である。

○醇化せる法華經

法華經は佛典中の一部屬にあらずして、一代の敎意を概括し進退し入眼したる、大統御の中心修多羅である、故に一經の始中終を通じて、法門の材料とすべきものは、比較的僅少であッて、多くは事實談の出沒變化で、一代の化意を反覆審明し、又力を極めて經の功德を讃歎して居る、それで一經の前後を通じて、總合的に一系統の下に組立てゝ見ると、不思議にも一の微妙なる一大法門が成立して來る、その大法門を種々の面から眺めて、種々のたゞならぬ名義の下に、特性を發揮して、一代超過の經典なることが解る、その輪廓を謂て諸法實相と爲し、その內容を謂ッて一念三千と爲したので、法性とも、佛性とも、眞如とも、菩提とも、涅槃とも、常住とも、寂滅とも、無相とも、般若とも、一佛乘とも、無上道とも、如來藏とも、秘密藏とも、いろ〳〵に名はあるが、それは一般大乘佛敎に通じた名で、而かも義は異ッて居る、眞と假と異ッて居る、究竟と未究竟と異ッて居る、圓と偏と異ッて居る、實と權と異ッて居るのである、法華經以外の經典で明かしたのは、假である、未究竟である、偏である、權である、名が同一だからとて、正味の違ッたものは、いくらも有る、それを分別しろと誡められて『水は一なれども、川は海にあらず』と法華の開經に、佛は說かれて法華經に對する特別の注意を與へられたのである。

諸法實相が法華經の身體だとすれば、久遠實成が法華經の氣命であると釋してある通り、この二個の大法門は法華經を經緯して顯れた無上哲理なるのみならず、亦一代佛經を進退して、その死命を扼して居る、それを總稱した正しき名義が、妙法の二字であッて、それを法譬具足して說明的に立名したのが妙法蓮華經の五字である。

文字は僅かに五字でも、道理はこれに盡きて居る、して見れば法華經といふのは、この五字より外にないと謂ッてよろしい、既に五字より外に無いとすれば、この五字が一代佛經を背負ひ、天地法界を持して居るのであるから、手を盡し得らるゝ限り、綿密周到に解剖して見なければならぬ、既に一部八卷二十八品五萬九千三百八十四言、殊には一代第一の聲を絞ッて、

この『法華經』、この『法華經』と稱讃の限りを盡された其實體であるから、只『經典の名だ』では濟まされまい、さればこそ、天台大師はこの五字の爲に、『法華玄義』十卷の法門を開演して、佛智の門戸を開らかれたのである、それば かりでは巧辯にまかせた附會だといふ疑ひも起らうかと、更に法華經の文々に就て、其義を釋した、それが『法華文句』十卷の法門である、一經の文々を縱横に分解して、其原素を摘示し、また之を歸結した、其反應を知らしめ、一部の組織的系脉をたどッて、妙法五字の大玄理は成立して居るぞといふことを示したのである、然らばその實際應用は如何となりて、修行門の仕立にしたのが、『摩訶止觀』十卷の法門である。

それで天台大師が、「支那の小釋迦」といはれるほどの明智で、遺憾なく法華經の本色を發揮して、始めて佛教全體に亘ッての統一を示されたのだが、理義が深淵にして而かも廣妙であるから、十分にその眞味を解し得るものが少い、偶ま依用すれば理義の紛雜を來たして、終に歸着を失して仕舞うやら、或は高遠に失して實用に疎く、或は纖巧に失して的切を缺くやら、つまり掛聲ほどには功用がなくて、徒らに論義者流の消閑具となり了ッた、此儘て果てれば天台

大師は犬死であッたのだが、眞誠の知己は千載を待つのことわり、末法の世となッて、本化の智眼を具した日蓮聖祖によりて、大師出世の本懷は、殘る所なく、餘い所へ手の屆くやうに的切明快の決判を與へられて、本末六十卷の生命は、精神的に發揮せられた、佛の智慧は凡夫の智に通じ、佛心は凡心と融して、その廣大高妙の行德が、その儘凡夫の手に移されるといふ破天荒の斷案を以て、法華經の大精神を開示した、天台大師の判釋が、のこりなく其材料となッて目出度本化開導の御用に立ッた、釋尊一代の肝心歸着は法華經で、法華經の精神は妙法五字である、此五字の爲めに佛は世に出現せられ、此五字によりて三世十方の諸佛は悟を開かれ、此五字によりて天地法界は保持せられ、此五字によりて一切衆生は德用を修成するので、智といふも、行といふも、位といふも、德といふも、因といふも、果といふも、皆此五字の外にない、上は佛菩薩の功德莊嚴より、下は人類日常の倫理に至るまで、凡そ道と名け德と稱するほどの法は、悉く此妙法五字を根本とするので、即ち法界根本の大善である、これを離れては佛も聖人も智慧も學問もなくなる、悟道に約しては「眞理」といひ、修行に約しては「正道」と

いひ、人事に約しては「正義」といひ、思想に約しては「正智」といふので、即ち天地法界無上絶

對の根本大法である。

さて何故に妙法五字にのみ限りて、「根本大法」と謂ひ得るかといふに、それは說主たる釋尊の自證自決である上は釋尊を否定せざる限り、何人も彼れ是れいふとは出來ない、されど其仔細はといふと、それは研究し得られないでもない、それを玩味するのは、どうしても法華經二十八品の說相を叩いて、其所詮の義意を探らなければならない、さては本迹二門の起盡、『序品』の四華六瑞より、『勸發品』の四法成就に至る迄、六萬九千三百八十四字の文々句々は悉く組織的に此五字を說明して居るのである、彼の妖怪話だと驚いた種々の說相どもは、すべて此五字の說明方法である。

若し妙法五字の「本法」なることを忘れて、法華經の文々句々が直ちに經意だと速了するときは、法華經は却て爾前の經々よりも、眞理の說明が疎略である、要するに讃める言辭が多くて正味がないことになる、平田篤胤なども、それて手を燒いたのである、讃めるに就ては、讃らるゝ所對のものがあるのだといふことに、氣が付かなかッたのは、平素の廣言にも似ず篤胤の淺慮である、祖典にも

金ハ燒ケバ彌ヨ色ヲ增ス劍ハ研ゲバ彌ヨ利クナル法華經ノ功德ハ讃レバ彌ヨ功德增ス二十八品ハ正シキ事ハ僅カバカリナリ讃ル言コソ多ク候ヘト思召スベシ

とあッて、品々の說相は讃辭が多くて、その讃め方に寓せて法の妙德を發揮したのであると斷ぜられてある、して見ると法華經〳〵といふ經の稱呼には、左の二樣の別がある

△讃める法華經……能詮の法華經……二十八品……色體

△讃められる法華經……所詮の法華經……妙法五字……精神

經文にも『如是妙法』とある、又『此法華經』とある、『如是』と指し、『此』と指すのは何物であらう、譬へば藥の「能書」に、『此藥は云々』とか、『かゝる藥なれば』とかあるのは、「能書」を指すのでなくして、中に裏みたる藥品を指すのであるといふことは、何よりも解りきッた話しであらう、それである、二十八品は「能書」である、妙法五字は「藥品」である。

能書のことだから、勿論服み方や功能を説明するのは當然である、藥品の尊貴を知らしめんが爲めに、略して其來歴や配劑をも示すのである、だれが何時どういふ因縁によって、此藥を發明した、其調合法は云々の藥種を以て配劑して、何々の病を療す、其功驗は箇樣〳〵、其服法は爾々と、條然として該藥品の功德を説いたのが、二十八品法華經一部の説相であるから、藥品に添えてある場合は言ふまでもないが、若し萬一藥品と離れた場合でも、思慮あるものは、その詳密なる「能書」を鑑みとして、何時でも其藥品を造り出すことが出來る、但し「能書」の讀めないものには出來ない、讀んでも讀み損うものには滿足のものは造れない、讀み得ても原料を調へることの出來ないものには造れない、若し配劑を誤るか原料を誤れば、良藥でなくて毒藥となるのである、正直正當に「能書」を讀んで、指定に寸分も違はずに製出したのが、眞正の藥である、能書の指定に背いて、自分勝手に造り出したのは、正しく僞藥である、東京下谷池の端仲町守田治兵衛が、「寶丹」といふ名高い藥を發賣して居る、然るに他の處でも寶丹といふ藥を賣って居る、藥品から包紙の體裁まで同じ樣に仕立てある、是れ寶丹に對する僞藥てある、甚しきに至りては、「守田治兵衛」といふ名前の人物を以て、「寶丹」なる藥を發賣せしめ、而かも其れが東京の下谷の池の端仲町へ家を構へて、それで其寶丹を賣出すといふに至ては、その僞紛の入念なるに驚かなければならぬ、若し果して其藥が功能あるものならば、何も必ず寶丹の眞似をせずとも可かりさうなものではないか、人名から地名までも類似せしめてその眞に擬せんとするに於ては、眞正の寶丹に望めて之を僞藥と斷定せなければなるまい、法華經に於ける經體の解釋も亦その通りで、法華經全部の義意を探り來て、此經典よりは、果して何物を產し出したかといふことを吟味するのに、如理如敎如法如説に解し去て、法華經二十八品の説相が、指せるまゝ命ぜるまゝに、痛快餘す所なき斷案によりて、之が經意即ち經典所詮の眞理を把住して、世間の迷妄を救ふべく宣傳せなければならぬ、若し爾うでなくして、自己の考を標準として、自己に似たるものを造り出したのでは、彼の僞藥と一般で、眞誠の法華經を體現したものとは謂へない、祖典にも

諸宗ノ元祖等法華經ヲ讀ミ奉レバ各其弟子等ハ我師ハ法華經ノ心ヲ得給ヘリト思ヘリ然レ

ドモ詮ヲ論ズレバ慈恩大師ハ深密經唯識論ヲ師トシテ法華經ヲヨミ嘉祥大師ハ般若經中論ヲ師トシテ法華經ヲヨミ杜順法藏等ハ華嚴經十住毘婆沙論ヲ師トシテ法華經ヲヨミ善無畏金剛智不空等ハ大日經ヲ師トシテ法華經ヲ讀ム此等ノ人々ハ各法華經ヲヨムト思ヘドモ未ダ一句モ一偈モヨメル人ニハ非ズ詮ヲ論ズレバ傳敎大師コトワリテ云ク雖レ讀ニ法華經一還死ニ法華心云々例セバ外道ハ佛經ヲヨメドモ外道ト同ジ蝙蝠ガ晝ヲ夜ト見ルガ如シ又赤キ面ノ者ハ白キ鏡モ赤シト思ヒ太刀ニ顏ヲウツセルモノ圓カナル面ヲホソナガシト思フニ似タリ

とあッて、法華經的に法華經を讀んだものがない、天台傳敎の二大師のみは、如法に法華經を讀んだ人であるが、時機が早いから端的に言はなかッた、今日蓮は既に其時機國處を得たから、躊躇なく法華經の精神を說破して、妙法五字が法華經の心である、一代聖敎の魂である、天地法界の本法である、『十方佛土の中には唯一乘の法のみありて二もなく亦三もなし』と佛の說置かせたまひたる一乘法を稱揚宣傳するのである、是れは自己の考といふものを空し去て、專ら法華經の指し示す所の、「文證」、「義理」、「意趣」の三を透徹して、釋尊の金言垂誡のまゝに

看取し得意して立てたので、他經他論を以て法華經を律した僞解釋ではない

今日蓮ハ爾ラズ、已今當ノ經文ヲ深ク護リ一經ノ肝心タル題目ヲ我モ唱ヘ人ニモ勸ム麻ノ中ノ蓬墨ウテル木ノ如シ自體ハ正直ナラザレドモ自然ニ直クナルガ如シ經ノマヽニ唱レバマガレル心ナシ當サニ知ルベシ佛ノ御心ノ我等ガ身ニ入セ給ハズバ唱ヘガタキ題目ナル歟

箇樣に判釋なされて、自己といふものは無く、全く釋尊と融合一致した見地より見定めたのである、といふのも、畢竟經文の說相を深く護念した結果である、『已今當の經文を深く護り』とある、此已今當の三說に氣が付かずに法華經を讀んだから、法華經の價も一代經の趣意も、俱に亡失するに至ッたのである、要するに法華經は釋尊の隨自意己證たり出世の本懷たる經說であるから、『一大事因緣』と經にも說かれてある、それを解するには、何事よりも先づ能說の釋尊に同情しての上でなければならぬ、その同情の有ると無い多いと少いて、眞僞正邪の如何が分れて來る、謂はゞ釋尊が即法華經、法華經が即釋尊であるとを默契し得て、やがて自身が亦その法華經に一如するほどの大同情がなければ、遺憾なく法華經を解し得るこ

とは出來ない、『經のまゝに唱ふればまがれる心なし』とならなければ『佛の御心が我等の身に入せたまふ』といふ譯には往かぬ、若し釋尊の御心と別離した心で讀んだのでは、聲は法華經でも心が法華經になッて居らぬ、了伯が平家を讀ませて、宇治河の先陣の段に泣いた、並居る諸士は壯快なりとして歡んだ、了伯獨り泣いたのは變だといふので、人が尋ねたら、壯快だといふのは、其形式を見たのだ、いかにも一代の晴業に、武門の面目を起し、勝利を博し喝采を博したのは、勇しいに違ひない、それは見物人としての地位で見たのである、我れは其當事者たるもの、心中を酌み、此晴れの勝負に、主公の愛馬をさへ賜はりて、いざといふ場に運拙く、萬が一にも負を取らば、腹掻切ッて果るの外なしと、一世の浮沈を賭けての勝負、その格護と謂ひ意氣といひ、勇壯の裏に萬緒の憂愁を含みて慘憺たる、その當時の心中を思ひ遣りて、斯くは涙を催したので、武人の崇ぶべき所は、形式にあらずして意氣に在り、虛勇にあらずして實情にあることを意味しての感泣であッたと聞て、人々も流石は良き大將よと感じたといふことがある、誰しも宇治河の先陣と聞いては、先づ「勇ましい」といふ方にのみ、氣を着けるのだ

が、それを涙を以て解したのは、詮する所精神を讀んだのである、自ら多大の同情を其物語の主人公に注いだ結果である、加藤清正が『論語』の「六尺の孤を托すべし」の文に深く契會を感じたのも、畢竟は清正自身が、その實地を經驗した人だから、膽に銘じ心に刻みその感通が深くて、清正即論語、論語即清正の場に達したからであらう、眼や口で讀んだのではない、血で讀み骨で讀んだのである、所謂「色讀」したのである、身に讀むまでに深く讀んだのでなければ、聖賢の書物でも、史傳物語でも、遺憾なく其精神を發揮するといふことは出來ない、況して佛陀の經典、しかも一代の精粹を籠めた法華經の事だから、身命を的にして讀んだものでなければ、癢い所へ手の屆くといふ眞解を下すことは出來ないのである。

法華經を身に歷て讀んだものでなければ、眞の解決を下す權利がない、釋尊が血で說た經典だから、血で解決しなければならない、空理窟や口先ばかりの獻立が、いくら立派でも、それは人生の實地に於て何等の益がない、紛々たる學說、芿々たる理義、いかほど幽玄に高妙であッても、肝心の結歸する所が、人生の實用に遠ければ、つまり一種の道樂仕事になッて了う

経典の組織的説相が、何ほど玉を連ね金をならべた妙説でも、實地に行ッての上でなければ經典が活きて物を言はない、大乘が佛説であるのないの、説手が誰れだのといふやうな詮索は、人間に血のあることを忘れたもの丶言艸である、そんな詮索どころの沙汰ではない、説手が誰れであらうと、少も動揺を感じない、經文に釋尊が説いたとしてある、その釋尊に用があるのだ、それが妖怪なら、その天怪が目的だ、理想的の人物でも、歴史的の人物でも、何でも構はない、（大乘非佛説論の史的價値を論斷するのは學問上の問題で予も其點には大に意見があるが自ら別論である宗教上何等の痛痒はない）、その説てある事柄なり意義なりが、こちらの入用である、それを神解契會して、其が巧妙なる組織より、公明正大確然不拔の大道を見出して血から血に傳へ、骨から骨に泌みこませて、人生の大意義を現出せしめたら、それで宗教として世を濟ひ人を度する一切の能事は畢ッたのである。

法華經は法華經みづからが、法華經の讀み方を教訓してある、血を以て讀めと指南してある「命ちがけ」で讀めと指定してある、本迹二門二ヶ所まで『不惜身命』と訓へてある上に、流通分

たる涅槃經にまでも、『身輕法重死身弘法』と誡められてある、即ち身に讀めといふことだ、只讀んだのでは解らないとある、理窟詰では解らないとある、さればこそ

法華經ノ流布スベキ後五百歳二千二百二十餘年ノ時ニ生レテ近クハ日本國遠クハ月氏漢土ノ諸宗ノ人々唱ヘ始メザル先ニ南無妙法蓮華經ト高聲ニ喚デ二十餘年ヲフル間或ハ罵リウタレ或ハ疵ヲ被リ流罪二度死罪一度ニ定メラレヌ其外ノ大難數ヲシラズ譬バ大湯ニ豆ヲ漬シ小水ニ大魚ノアルガ如シ經ニ云ク而此經者如來現在猶多怨嫉一況滅度後ト又云ク一切世間多怨難信ト又云ク有ニ諸無智人一惡口罵詈ト或ハ云ク加ニ刀杖瓦石一ト或ハ數々見ニ擯出一等云云コレ等ノ經文ハ日蓮日本國ニ生ゼズンバ但佛ノ「御言」ノミ有テ「其義」空シカルベシ譬ヘバ花サキテ果ナラズ雷鳴テ雨ノフラザランガ如シ佛ノ金言空クシテ正直ノ御經ニ大妄語を雜ヘタルナルベシ

斯くして讀んだ法華經の精神が、妙法五字である、妙法五字を人生大問題の解決及び實行として與へた福音が南無の二字である、それは妙法五字に南無するので、只南無では何にもならぬ

南無妙法蓮華經の七字で、法華經と人間の接合が完く成りて、救世の妙音となり、人生の大意義となって來たのである。

妙法蓮華經の五字は經典の名である、經の名を崇拜するのは、所謂經典崇拜である、佛名を崇拜するよりも幼稚な宗教であるといふ非難があッたが、決して爾うでない、經典の名には相違ないが、それは「妙法蓮華經」といふことを說いた經だから、その主義を其儘に名にして妙法蓮華經と題したので、名の下に直に所詮の理が備足して居る、所謂「名體不離」といふので名は體の爲には「能召」體は「所召」である、故に唱へるには崇拜するには、名のつもりでなく直に體を目的として居るのである、即ち法を崇拜するのであッて、典籍を主眼とするのではない、「妙法蓮華經」といふ、大眞理の本法に歸依するのである、佛名を稱すると言ッても、名が目的ではない、やはり名號に即して佛體を稱念するので、阿彌陀佛といへば、彌陀尊そのものを呼ぶのである、經の名を稱するのも其れと同格で、經の法體を稱するのである、それで佛名と經名とは、「人」と「法」との違ひて、佛は敎法を說くことは出來るが、敎法所詮の法理を造ることは出

來ない、却て法理より造られたものである、法理を全顯した經典は、律法的に法理の典型となッて、經典そのものが直ちに佛を造り出すものと定められてある、佛陀も

法ハ諸佛ノ師トスル所

と宣べられて、法は「能生」、佛は「所生」、即ち法は親にして佛は子であると仰せられた、譬へて言へば、帝國議會に於て、議員が相議ッて法律を定める、兩院を通過した上で、いよ〳〵陛下の御批准が濟むと、國法として發布せられる、政府なり議員なりは、元々その法律を考へ出したり、協議評定したりして、それを造ッた人だから、法律より上の權力がありさうなものだが、既に造られて國法と定まるが最後、いくら造り主だからといふて、その法律を左右するといふ由には往かない、謹んでその法律を遵奉して師と仰がなければならぬ、自分たちが役人となッて政務を扱ふのも、議員に擧られて議會へ出るのも、やはり其法律から產み出されて出なければならぬ、それと同じことで、佛は敎法を說いた人だけれども、一たび經典となッて法理を全現した以上は、佛といへども之を師と仰がなければならぬ、そこが佛法の殊勝な所とい

ふものだ、劣ッた佛名を稱念するのは、まだその上があるから、「無上道」とは謂はれぬ、即ち究竟法でない、有上道未究竟法であるとすれば、絶對眞理でも本有實在でもない、そんなものは「命がけ」で崇拜する價がない、「南無」といふのは歸命といふことで、命をかけることである、から南無阿彌陀佛など、、掛替の命をうッかりは差出されない、尙早い話しが、佛道といふのは、佛に成る道法といふことで、道といふのは能通の義といッて、彼と此と通ひ達するといふことだ、衆生から佛に通うといふのは、同一の體であるから通達することが出來るので、只衆生に在る時は因行、佛に在る時は果德、因と果の違ひはあるが、因果といふものは動くもので、居据りの作り着けのものではない、因に果を具へ果に因を具して居る、花が果を結べば果が種となりて又次の花を具へて居ると同格で、衆生の心中に佛を具へて居るから、その佛を光顯すべく修行の因を修するのであるし、佛の方にも「偶然の佛」「無用の佛」といふものはない、矢張衆生が修する通りの佛道を修して居らなければならぬ、吾々凡夫の南無阿彌陀佛と唱へて、それを佛道修行とするといふのは、凡夫よりも尊い佛を拜むのだから、一應聞えて居るとして、

さて其阿彌陀佛は何を拜んで本尊としたのであらう、まさか自分を拜みもしまい、それでは本來本有に實在して居る佛かといふに、矢張修行して佛になられたとある、しかも十切正覺の佛と定められて、至ッて新參な佛さまである、元來佛法の原則として、佛と衆生と同一の道法でなければならぬ、迷悟の階級は異るとしても、持つ所の法は必ず同一でなければならぬ、吾々は念佛を申して、佛は外の法を持つといふならば、既に已に虛妄の法である、法華經に依ると、阿彌陀佛は念佛を修行したといふことは無い、やはり法華經を修行したとある、經に彌陀如來の因位を說いて、『常に樂ッて是妙法蓮華經を說く』とある、因位の修行ばかりでなく、今でもやはり妙法を說いて居るとある、法華經を說くといふのは、佛の修行なり自受用法樂なりである、佛の爲さることと同一の事でなければ、因果背畔して佛道とならない、それを念佛で事の濟むものと考へて居るのは、佛法の地盤をぐらかした話してある、それでも淨土三部等に念佛しろと說いてあるではないかといふ不審か、それは一代の敎相を辨へないから起る癡難で、その爲に先判後判といふことが入用であるのだ、佛みづからの行業と異ッたことを凡夫に修行

せよと勸めたのは、畢竟佛の本懷を隱して、姑らく一る機緣に應同して、假りに調熟せしむる方便に說いた、對機の法である、逗緣の敎へである、暫く用て還て廢すべき權道である、それてあるから隨自意眞實の法華經を說くにあたッて、單に法華經の最勝第一だといふことばかりでは、比較は取れないから、『已に說き、今說き、當に說かん』、すべての經々は本懷でないぞ、但此法華經ばかりが眞實の經であるぞよ、『四十餘年には未だ眞實を顯はさず』、『十方佛土の中には唯一乘の法のみありて二も無く亦三も無し』と述べられ、『餘經の一偈をも受けず』と誡められたのである、前の經々に種々の異說があるから、その撞着を避けるため、前說を取消したのである、前說ばかりでない、同時に說く經典でも、當に說く經典でも、法華經以外の經典は、すべて非本懷である、第二義已下の說であるといふことを示して置かないと、一代敎法の統一を缺くの恐れがあるから、念に念を入れて、六難九易の比較を設け、十喩稱揚の咒量を示し、丁寧反覆に法華經の他經と異る所以を說明なされたのは、只事でないと思はなければならぬ、この已今當の三說超過といふ御自判には、いかなる經敎も皆否定せられて、究竟法で

ないと決定されてある、この意味を知ッて讀んだのでなければ、法華經も一切經も悉く反古に歸して了う、已今當の咒量を無視して、法華經がどうだの、佛敎がどうだのと言ふ輩は、解了を失するのみならず、釋尊を侮辱したものである、法華經はおろか、佛敎のブの字をも口にすべき權利のないものである、佛陀に信順してこそ佛弟子である、佛陀に背いて居りながら佛敎を云々するのは、盜賊が法律を講釋し、親殺しが孝經を說くやうなものである、念佛などを以て佛敎の要を得たと考へて居るやうな、情けない淺膚の思慮で、人生を救はうなどゝは思もよらぬことで、斯くも佛敎の目鼻が開いて居らぬといふのは、只佛敎社會の大患ばかりでない、實に世間人生の一大災難である、世界で一番大きな問題といふのは、「佛敎の始末を付ける」一事である、世を救ふ唯一の明敎たる佛敎が、九分九厘まで誤謬解釋で充たされて居るとあッては、水道の源地に毒藥を投じ、許嫁の良人が癩病になッたやうなものである、大問題の上に重問題であるのだ、左ほどに感じないのは、神經が痲痺して居るからである、つまり佛敎といふものを知らないのである、何より早い判け方が、佛を本尊とするのと、法を本尊とするの

異目である、南無阿彌陀佛は弟子が弟子を拜むのである、南無妙法蓮華經は、弟子が師を拜むのである、「佛」は凡夫の前では師であるが、法の前では弟子である、「法」は佛と凡夫とに互ッて師である、佛陀はみづからの師とする所をば、一切衆生にも師と仰がしめて、自分と同一の因行果德に安住させたいと思召して、法華經を說かれたのである、しからば南無妙法蓮華經と唱へるのが、凡夫にも佛にも夫が宗旨である、佛陀の宗旨としたまふところでなければ、吾々に在ッても宗旨とするに足りないのである、況して佛も佛、權佛架空の理を正眞の道法と執して、實佛本法を忘れて居るのは、「法勝佛劣」の原則に背いた上に、更に「權實不辨」の失がある、權實不辨の失の上に、更に「權實雜濫」の失もある、否、尤も佛子の大患とすべき、「執權謗實」の大過失がある、凡そ佛道修行といふことは、佛に成るといふのが最後究竟の目的である、果して然らば佛が佛に成ッた通りの宗旨を奉じて掛らなければなるまい、佛は常に妙法を願樂するとあるから、吾々も妙法に依らなければならぬ、但しその「妙法」といふものは必しも佛にばかりあるのではない、近く謂へば吾人の上にもある、天地山川艸木土石の上にもある、森羅

の萬法は即ち妙法の體である、さらば佛陀の厄介にならずに、哲學的に思索するか科學的に研究したならば、相當に思惟觀察の能力を具べて居る人類の事だから、佛陀のやうに本體の理法を考へ中てられないこともあるまい、事によッたら釋迦よりも、今少し器用に當世風に、「舶來の妙法」が出來やうも知れぬ、若し首尾よく考へ中てたらば、「妙法」でも古いから「珍法」とでも名け、「蓮華」も佛け臭いから、櫻を以て譬へよう、いや櫻ばかりでも香ひが乏しいから、梅にしようか、梅は少し支那くさいから、ずッと西洋がッて薔薇を加へやう、これて色香具足した名稱を得た、人格的に言顯はせば、南無珍法櫻薔薇佛、非人格的にいへば珍法櫻薔薇經、本山は大我山巽軒寺でも、清徒山新佛寺でも構はない、一流の新宗敎を開いて、時代有緣の衆生を濟度するといふか、それは誠に御苦勞でもあり、お手際でもあるが、佛陀ほどの老舗が付いて居ないから、先づ〳〵御免を蒙ッて、矢張「八咫の鏡の商票」の付いて居る賓丹にして置かう、殊に吾々は佛敎者であるから、何はともあれ、佛敎の規則に遵はなければならぬ、凡そ佛敎では、理法といふものは凡夫が有して居りながら、明了に徹見することが出來ないものと定

めてある、尤も妙法の所有主であるのだから、悟ると否とに拘らず、日々に用ゐては居るのであるが、只「煩惱化」して使用して居るのである、稀れに觀察專念の結果、一分の妙は見得ないでもない、孔子の「仁」のごとき、基督の「愛」の如き、老子の「道德」なり、カントの「哲學」なり、分に見得しては居る、凡俗に比べれば勿論超越したものには違いない、けれども妙法の本體全部を徹見したとは謂はれない、すべて有漏智の分齊であッて、未だ漏盡智を得て居らない、漏といふのは煩惱の事である、煩惱といふものは昏煩惱亂といふことで、心根に迷惑が纏て居るから、心が瞭然しないといふことだ、而して其の煩惱に段々の階級種別があッて、大別して、『見思の惑』、『塵沙の惑』、『無明の惑』の三段とする、見思とは『見惑』と『思惑』といふことだ、見惑に八十八使の煩惱がある、是れは六根(六根とは、眼、耳、鼻、舌、身、意)の中の意根が、意識の對境たる法塵に對して起す煩惱で、其惑原が凡そ十種ある、身見、邊見、見取見、戒取見、邪見、貪、瞋、癡、慢、疑、この十種が三界四諦の下に交互して八十八使となるので、『使』とは驅役の義で此惑の爲に迷界に驅り出されて心を苦めるといふ意味である、詳しく說明する

暇がないから、要を取て一言する、此十種の中でも、前の五が本となるので、それは多く事物を考へるに就て、中正を得ないことをいふのである、要するに理を見るに諦かならざる煩惱といふことだ、これを破るのに一々方法があッて、智識と修行と同時に進み行きつゝ之を斷破するのである、是猶諸煩惱の中の最下等の極やさしい煩惱である、まだ此上に『思惑』が八十一、『塵沙』の煩惱は俗諦の理を障へる惑で、聖賢の上に在る、又その上に『無明』の煩惱が四十一品あッて、高等の聖者、所謂菩薩の境界でも、四十一位の階級があッて、一品の無明を斷じて一位を進め、最後の等覺位まで行ッて最後心に、元品の無明といふのが殘ッて居る、それを斷じ盡して、始めて佛に成ると定めてある(姑らく階級順序を知らしめん爲め叙列したが、この階級を經ずして即疾に斷ずる道もある夫れは別論)このすべての煩惱を奇麗に斷破し盡した上で得た智慧を無漏智といふので、その智慧で見た理法でなければ、「諦理」とは言はない、この多くの心、心の垢が付いたまゝの智慧では、その器量相應の一分の理は見られるが、決して圓滿に妙諦の眞如實際を洞見することは出來ない、而して此心の垢たる煩惱は、その當然なる順序方法

に依ッて除かなければ、決して斷除することは出來ない、どの位發明な人でも、人間の心は力の限られたものである、それに「有待の依身」といふて、身體があるから、一層すべての力を限られて在る、それて考へやうといふ理法は無限のものであるから所詮考へ盡すことが出來ない、若し之を考へ盡さふといふには、やはり理法と同量なる無限の力を心に得なければならぬ、元々理法と吾とは別種類のものではなく、同根一體のものであるから、方法によッては同量の力用を生じないとは限らない、そこで心の上に無限力を得ようといふには、心を支へて有限ならしめた原因を除かなければならぬ、その原因といふのが即ち煩惱である、それが心の垢となッて、眞智を罔して居るのである、斯く垢付の心で、いくら理だの法だのと獨判斷をしても駄目だと定められてある、然る上は自ら出精して一枚〳〵に其垢を剝取ッて、佛陀と同樣になるまでの修行をして眞智を開くか、又は一切に自己を空して了ッて一旦佛陀の如實智に服從して、歷刼修行の代りに絕對の信仰を捧げて、一も二もなく佛陀の指敎を把り、その正知見を借りて萬法を照すか、此二つの方法の內を擇ばなければならぬ、前者は「法行」、後者は「信行」

といふのである、いづれにしても法華經を外にしては到底成効しない、何者、佛陀の眞智妙法の眞理が契合融一して、二なく別なきものとなッて、敎法的に詮し出されたのが妙法蓮華經であるから、吾々どころてなく佛陀それ自身てさへ、法華經を離れては存在しないと說かれてある、故に法華經を說いた佛が、即ち法華經で顯れた佛であッて、これ實佛である本佛である、妙法の本法と一體であることを表現された圓滿の佛陀は、佛陀が即ち妙法である、本佛に由りて說示された妙法は、妙法即本佛である、故に此法佛契合の呼吸、不可說無限の力が存立して、法界の本主たり父母たり本師たる大德を有して居るのであるから苟くも佛陀を奉ずるものは、妙法の名によりて本佛を認識し、佛陀の敎訓に服從して妙法を奉持しなければならぬ、いくら妙法が萬有の眞理だからといふて、佛陀の顯說以外に推究を恣まゝにするのは、迂愚僧漫の甚しきものだとしてある、櫻薔薇經では結局の收りが付かぬ、本佛の宣示顯說に從へば、妙法蓮華經でなければならぬ、歸依服從して佛の慈訓を體し、その本法を吾がものとするには、吾命を即ち身心の二つを差出して之に南無しなければならぬ、依て南無妙法蓮華經でなくては

ならぬ。

經文にも『若有ニ能持一即持ニ佛身一』とある、能く法華經を持つものはとりも直さず佛身を持つのだとある、又『佛自住ニ大乘一』ともあッて、大乘とは、一乘とも言ッて法華經の事である、又『此大乘方等經典是諸佛眼目諸佛因レ是得レ具ニ五眼一』ともあり、又『佛三種身從ニ方等一生』とあッて、法佛一體の關係を爲して居る、文に方等といふのは法華經の事である、故に法華經即本佛で、その本佛の本名を「妙法蓮華經」といふので、釋迦とか彌陀とか多寶とかいふのは、皆垂迹上の假りの名である、妙法本佛は天月の如し、諸佛如來は水中の月の如きもので ある、天月は一つより外にない、水月はいくらとも豫め數を限れない、水さへあればどこへでも、又幾つでも影を浮べる、圓さと光りとは似てあるが、元々實月でないから影のみで體はない、妙名を以て妙體を召び妙體よりして妙宗を把り妙宗よりして妙用を起し妙用よりして妙教を詮したのが、妙法五字である、この名、體、宗、用、教の五重玄は、法華經二十八品に亘ッて說明して居るが、その能詮能釋は二十八品の中でも、『如來壽量品』に存して在る、說相の

起盡でいへば、壽量品の二十八品である、此壽量品といふのは、正しく久遠實成の本佛を說顯はした現文である、その本佛德用の燒點が妙法五字である、故に聖祖は常に『壽量品の南無妙法蓮華經』と曰はれて在る、こゝに至ッては經の名どころではない、全く魂魄である、扨て其壽量の本佛といふのは、釋尊一人の上の事かといふのに、爾でない、本體でいへば一切衆生と一體である、行因得果して佛陀的力用を具へたのが如來で、それの缺けて居るのが一切衆生である、「體」の上からいふと寧ろ佛の方は出店で、凡夫の方が本家であるが、「修行」の上でいふから、因果的に迷悟の分を立て、本從感應の儀を匡して、佛を師と仰ぐのである、所謂宗教的に仕上げたのである、肝心の體が同一である上は、修行して佛陀の德用內に融一し得られないといふ理由はないといふので、「發心即到」と定められて、妙名を受持する當所、直ちに本佛の體用を現じ來るのであると教訓せられたのである、祖典にも

此法華經ニハ我等ガ身ハ法身如來我等ガ心ハ報身如來我等ガ振舞ハ應身如來ト說レテ候ヘバ此經ノ一句一偈ヲ持チ候人ハ皆此功德ヲソナヘ候南無妙法蓮華經ト申ハ是レ一句一偈ニテ候

然レドモ同ジ一句ノ中ニモ肝心ニテ候南無妙法蓮華經ト唱ル計リニテ佛ニナルベシヤト此御不審所詮ニ候一部ノ肝要八軸ノ骨髓ニテ候人ノ身ノ五尺六尺ノタマシヒモ一尺ノ顔ニ顯ハレ一尺ノカホノタマシヒモ一寸ノ眼内ニオサマリ候

「丈身」を去て「尺面」に就き、「尺面」を去て「寸眼」に就く、『精粹は多雜ならず』の理り、要を撮て廣を攝するの活法、眞に末代應時の至教である、又南無妙法蓮華經ト申ハ法華經ノ中ノ肝心人中ノ神ノ如シ是ニ物ヲ並ブレバ后ノ二リノ王ヲ男トシ乃至后ノ大臣已下ニ内々トッグガ如シワザハヒノ根本也正法像法ニ此法門ヲ弘メヌハ餘經ヲ失ハジガ爲メ也今末法ニ入リヌレバ餘經モ法華經モ詮ナシ但南無妙法蓮華經ナルベシカウ申シ出シテ候モ私ノ計ヒニモアラズ釋迦多寶十方ノ諸佛地涌千界ノ御計ヒ也此南無妙法蓮華經ニ餘事ヲマジヘバ由々シキ僻事也日出スレバ燈火詮ナシ雨ブルニ露ハ何ノ詮カアルベキ嬰兒ニ乳ヨリ外ノ物ヲ養フベキヤ良藥ニ又藥ヲ加ル事ナカレ純一の至法は、醇乎として醇なるものであるから、決して雜多を許さない、並列肩隨することを許さない、仙藥のあとに凡藥は無用である、況して僞藥は何の詮もない、何に況んや他の毒藥をやである、末世今日の時代は、面倒のない、極めて簡單にして、而かも「利き目の多い」靈藥たる至法でなければならぬ、「能書」の讀み損ひから案じ出された、愚藥、凡藥、僞藥、毒藥も困るが、藥の代りに「能書」を服まされても閉口する、祖典にも左の如く不得意の法華經は無益だとある。

末法ニ入ナバ迦葉阿難等文殊彌勒菩薩等藥王觀音等ノ讓ラレシ所ノ小乘經（迦葉阿難）大乘經（文殊彌勒）並ニ法華經（藥王觀音）ハ文字ハ有レドモ衆生ノ病ノ藥トハ成ルベカラズ所謂病ハ重シ藥ハ淺シ其時上行菩薩出現シテ妙法蓮華經ノ五字ヲ一閻浮提ノ一切衆生ニ授クベシ

是れが『醇化せる法華經』といふのである。

雜記

○藝術布教の第一歩

言論の布教あり、文字の布教あり、亦藝術の布教なくばあるべからず、藝術布教とは、世のあらゆる藝術を應用して、或は聲に或は形に、成し得る限りの善巧適用を盡して、美感快感のうちに、知らず識らずの布教感化を及ぼすの謂ひなり、音樂あり、文藝あり、繪畫あり、彫刻あり、詩歌演劇、雅樂俗曲、應用妙化至らざるなくして、悉く一佛乘を讃す、之を藝術布教といふ、けだし人情の尤も快適なる方面に投入したる、下種の器械水雷なり、末代當今の化導法としても、將又進歩せる文明國民の誘導法としても、恐らくこの方面の感化成功は、他の言論文章のみを以てするよりも、數倍の効力あるべけん歟、

布教に熱心なる教家は、この消息を解して吾人に同情すべきを疑はず、この程吾が妙宗祝賀會に演奏せられたる、各種の俗曲新作の如き、實にその一例なるべし、中にも琵琶歌『小松原』の如き、常磐津『船守』の如き、聽者をして深大の感激あらしめ、滿場を動かして恍惚たらしめたるごとき、到底尋常辯論者流の講演などに於て爲し得ざる所の効果なるべしと目擊したる人の等しく感ぜる所なり、況や舞奏妙調相諧ひての一大快感は、不思議の力を以て人心を美化し行くなり、藝術布教の幕は既に開かれたり、吾人は今後ますゝ此方面の眞正なる發達を待つこと切なるもの、願くは世の同感者と共に、力をこの點にも注がんことを念じて已まず、諸君記せよ、文藝も亦宗教の支配を受くべき人文現象の一なり。

○祖典の流布は則ち宗法の流布なり

前きに加藤文雅氏の『御遺文』縮刷ありてより頓に祖典の大流布を來たしたるは正しく宗法弘布の一捷路を拓きたるものといふべし今又祖典の注釋は師子王文庫によりて開始せられ古注古書の蒐集合刊は加藤文雅氏によりて發表せられたり此兩美擧は『御遺文』縮刷に續ての大方便波羅密なり宗法弘布の爲めに賀すべきの至りならずや要するに世間の求道心が刻々に進歩するにつれて宗界の之に對する弘道方針も亦幾層の進境なかるべからざる筈なり蓋し『聖典講究會』の興立は内外の要に應じたる善良なる施設といふべきなり吾人は祖典の流布を喜ぶと共に其一層有効なる意味にての流布を希ふや切なり彼の『遺文錄』を讀んで徒らに年代の順を逐ふの小意味の爲めに義を排するの大意味を失せる失意讀者の多きを遺憾としつゝありたる今日將さに此種の缺點を補はんとするの淨擧に接したる正しく一層の深き悅びを得たるものなり宗法の盛恐らく是よりならむ

聖典講究會

〔會員を募る〕

本會の主業は日蓮聖祖の御遺文を平解注釋して世人を益せんとする目的を以て興立されたる前代未曾有の大編纂事業なり

○編纂注解の主任は田中智學居士なり
○此聖業を助けんとするものは本會に加入することを得
○入會を希望するものは左の所へ御照會あれ

申込所　東京市京橋區新富町六ノ二　師子王文庫事務所

○不思議なる雜誌

人よく『妙宗』を激賞して『不思議なる雜誌』といふ其の感化力の強大なるに驚きてなり凡そ世に宗教雜誌の數中々に多きも感化の點に至りては全く零なるを如何にせん而かも感化力の有無を問はざるもの多きを如何せん偶ま企て及ばんとして似て非なる人まねを裝ひて却て沐猴にして冠するの愚態を演ずるを見て吾人は寧ろ之を悲む由來宗界の我慢勝なる良模を他に取りてその本を誹る之を盜法といはずして何ぞ凡そ現代の宗界に於て多少宗風の眞に近きものは皆曾て吾人が之を啓發したる所のもの而かも之を模して得々たるはまだしも陰に用ゐて陽に訕る其痴態惑むべきにあらずや宗界の有志者は疾く醒覺して懺悔せざるべからず

○新刊

春來續々として新刊の準備を爲し今やその重刊に附すべきもの相續て製出せられ

本書は『日本國の宗旨』、『末法の大導師』、『世界統一の天業』、『勅語玄義』、『宗綱提要』、『法華經叢談』の六教篇を合刊したる便利有益の美冊にして繙讀用又は進物布教用として尤も適當なる新裝冊子なり

（田中智學居士著）

妙宗六教篇

正價金二拾五錢
郵稅金四錢

尚新たに冊を爲したるもの『妙宗手引草』あり又『法華經叢談』あり尚六書を合卷したる『妙宗六教篇』あり今後引續て出づべき計畫中のもの二三種あり追々發表せられんとす

法華經叢談壹部金五錢郵稅五厘

明治三十九年五月九日印刷
仝　年五月十二日發行

妙宗六教篇
正價金貳拾五錢
郵稅金四錢

著作兼發行人　相模國鎌倉郡鎌倉町四百二十八番地　田中巴之助
印刷人　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　青木弘
印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場
發行所　相模國鎌倉郡鎌倉町　師子王文庫
弘通元　東京市京橋區新富町六丁目二番地　師子王文庫事務所

不許複製

文字布教
第六冊

法華經叢談

田中智學居士述

（新刊五月十五日より發賣）

正價金五錢（送料五厘）

割引
五部以上　一冊四錢五厘
五十以上　一冊四錢
百部以上　一冊參錢五厘
送料ハ別

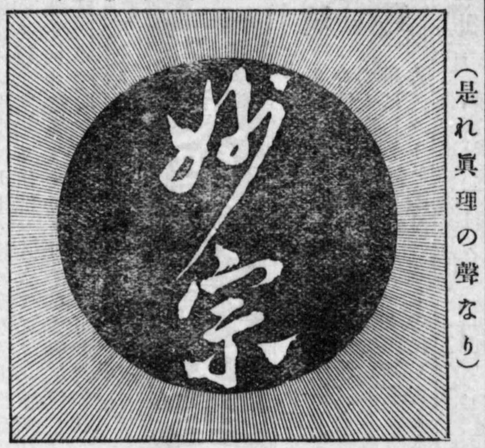
◉新形美本　言文一致體　總ふりがな付　文章痛快　義理明晰

此書は『法華三昧』、『法華經の文字』、『醇化せる法華經』の三要篇を收めたる最新刊の布教用良冊なり、殊に『醇化せる法華經』の一篇は當代思想界の惡見を痛破して遺憾なき一大雄篇なればナマギヽなる癖論家の多き今日特に最要の教書なり

弘通元　東京市京橋區新富町六ノ二　師子王文庫事務所

（毎週發行の佛教雜誌）

（是れ眞理の聲なり）



（是れ正義の血なり）

◉毎日曜日發行◉主筆田中智學◉

◎記事嶄新材料陳腐のものなし
◎文言平易通俗にして解し易し
◎本誌の文章は既に世の認る所

◉本佛釋尊の大精神
◉唯一妙法の大面目
◉末法救主の大絶叫
◉社會道義の大方針
◉人生歸着の大指導
◉日本建國の大理想
◉世界統一の大福音

感化の實力
天下無比の
大雜誌なり

價則
△壹部　金四錢（郵稅五厘）
△半ヶ年（廿五回）前金壹圓（送料共）
△壹ヶ年（五十回）前金貳圓（送料共）

東京市京橋區新富町六丁目貳番地
弘通元　師子王文庫事務所

日蓮上人の遺文は天下の絶妙文なり其思想は世界の絶妙想なり、信ずるものは元より、謗るものも疑ふものも研究せんとするものも、俱に是非とも一讀せざるべからざる世界の一大寶典なり、文章の雄大壯烈なるばかりでも、日本國ありて以來の一大産物なり、況や其思想法門の深遠宏大なる、世界の何ものを以てしても比する能はざる所ろなり、極端にいへば、凡そ人間と生れたる甲斐としても必ず一たび之を讀まずんばあるべからざるものなり

靈長閣藏版

日蓮聖人遺文全集

注意

上人の遺文は『錄内、錄外』六十五卷『遺文錄』三十卷其他の『別集』數十卷之を總計すれば百卷已上にて洪帙大冊その代價『二十有餘圓』にあらざれば揃へ難し然るを今回その全部を縮刷して一冊の小本と爲し携帶にも便利となり購求するにも前記の大廉價にて得らるゝ樣にし加ふるに『目錄』『索引』等周到綿密に行屆き校正も嚴重にし全國を巡りて一々御眞筆に照校したる未曾有の出版なり閲讀用はいふも更なりタトヒ讀まざるものにても御本尊寶前の御備用として最適當の寶典なり

正價(上製)一冊金貳圓

小包料十五錢

袖珍縮刷○總皮表紙帙造り金文字天地金美本(三方金は拾二錢上り)

弘通元 東京市京橋區新富町六丁目 師子王文庫事務所

發賣元 東京京橋南傳馬貳 泰文社

『勅語玄義』は教育勅語の御精神を法華經の妙諦眼より開顯して忠孝國體の眞意義を發揮したる宗教界教育界未曾有の大斷にして義を詮すること幽玄これを述ぶること平明何人と雖も一讀して國體の靈奇と忠孝の深義とを知り端然として頓に正大の氣を復活し來らんこと必せり現に讀了の人々にして勅語奉揭の誓を申出らるゝもの續々たる事實明かに是を證せり

勅語玄義

文字布教 第一册 第二册

(田中智學述)

兩書同形同價

一册 正價 金五錢五厘

郵稅 施本用割引

△五部已上一册四錢五厘

△五十已上一册四錢

△百部已上一册三錢五厘

△郵稅は別

(勅語玄義)の表紙は八咫の神鏡銀色漆として光明を放ち紫雲四圍に棚引き恵匠尤高潔内容の正大と相對映す國體の精神を形示したる線畫說法なり

『宗綱提要』は本化妙宗の何たるを明示する爲めに撰定せられたる簡潔平明の指導書にして「本化」の意義「妙宗」の名「法華經」の眞意「破邪顯正」の大義より「末法の時代的救濟」及び「思想道德の統一」を論じ「即身成佛」の妙旨「娑婆即寂光」の事觀を明し以て末法の憲教たり閻浮統一の妙法たることを最も通俗に最も親切に述べたる良書也

宗綱提要

(宗綱提要)の表紙は八阪瓊の曲玉光光相連りて溫蓄の妙致仁慈の相を寓す末法救護の妙宗その面影紙上に躍る法界の靈元を形示したる線畫說法なり

代價改正

東京京橋區新富町六ノ貳 師子王文庫事務所

代價改正

日本國の宗旨

田中智學 述

『日本國の宗旨』は法佛身土の四重の法門により一大事因緣の所在を明にして日本國の宗旨は先天的にこの日本國に具備したるものなるを縷述せる名篇にして版を重ぬること十七全國に普及し妙宗宗義光揚の先驅たり一讀して捨邪歸正したる人々尠なからず以て日本國の眞價と本化妙宗の主張とを知るべし文章痛快義理明晰一閲人をして感起せしむ『末法の大導師』と姉妹篇たり

好施本

兩書同形同價 五錢（郵稅五厘）

施本用割引
- 五冊以上五十未滿 一冊四錢五厘
- 五十以上百冊未滿 一冊四錢
- 百冊以上極度割引 一冊參錢五厘

送料は此外

末法の大導師

田中智學 述

『末法の大導師』はこの法界人生の混濁墜落に對しては自然に之を救濟すべき本佛の力用ありて三世常恒に教化せられたまふ中に特に今時末法濁惡世に向ッては深くその救濟に焦慮したまひ懇じめ『末法の大導師』として万年の光明たるべき一大救主を下したまへる大事緣を說ける名篇にして論斷公明詮理幽玄此書出るや大に思想界の倒惑を警破す『日本國の宗旨』と姉妹篇たり

この二書は刊行すでに久しく幾十萬部を出しても猶續々申込みある一大名篇なり このたび版を組みかえて「文字布教型」にあらため表紙の繪樣も全く一新して目のさめるほどの美本となれり高尙優雅の意匠一見して宗法の威力を揚ぐるに足る現代出版界に比類なき妙裝なり文字また鮮明なれば施本として眞にうるはしき贈物なること方今の佛教界に比類なきもの也

弘通元

東京市京橋區新富町六ノ二
師子王文庫事務所

代價改正

教育勅語全文寫し授與す

●模範廣式
●佐渡始顯

御本尊おん寫授與す

申込所 東京市京橋區新富町六ノ二 師子王文庫事務所

（希望のものは箱代包裝送費として一個毎に金五拾錢添へて申込あれ）
（希望のものは箱代包裝送費として一個毎に金三拾錢添へて申込あれ）

田中智學居士述 《古今未曾有の論斷》 新形美本 寫眞入 言文一致体……（代價四月十五日より改正す）

世界統一の大業

正價 一部 金五錢（送料五厘）

割引
- △五部以上 一冊 四錢五厘
- △五十以上 一冊 四錢
- △百部以上 一冊 參錢五厘

◉大に讀め◉

新形美本 寫眞版入 言文一致體 總ふりがな付 文章痛快

此書は世界に未だなき深淵高大の理想を開闡したる一大新論にして特に日本帝室の御紋章たる「十六ノ菊」が世界統一の古き票章たるとを發見して縱橫に統一主義の眞意義を論明し各國帝王大統領學者政治家等に對する切實なる一大勸告意見として世に顯はしたるものなれば時代の唯一指導として大に閲讀せしめざるべからず、施本布教用の良書たる所以なり

弘通元 東京京橋區新富町六ノ貳 師子王文庫事務所

よろこびをわかつ

精驗目藥 勝眼水

經ニ云
功德殊勝眼

陸軍一等軍醫小山時從先生方劑
妙宗主筆田中智學居士實驗證明

外護
販賣高多數に達し利益あるに至らば妙宗基礎金に組入るか又は擴張費に充用するかして外護の助とすべし

主治功能
○トラホーム○はやり目○血目○急性血膜炎○慢性血膜炎○血膜性眼精疲勞○其他一切の眼病によし

正價
壹器金拾錢 送料貳錢

弘通元
東京市京橋區新富町六丁目

發賣緣起

この勝眼水は本誌主筆田中智學居士が本化宗學研究大會の際重き眼病に罹りたる時小山軍醫大責任を以て治療し數旬にして快愈せしめたるは當時有名の事實として天下皆之を知る然るに其際小山軍醫の精撰處劑せられたるこの勝眼水は實に不思議の効驗あるを以て紀念として廣く天下の同患者を救ふべく小山氏の仁術を分たん爲め發賣するものなり

◉取次希望の人は照會あるべし◉

師子王文庫事務所

訓譯讀本 御妙判（既刊四種）

宗徒信行上必要の聖判を嚴密周到なる訓譯本となし○よみがな○義理がな○大中小三種の句讀を切り○四號の活字を以て讀みたがへなきやう本文を書下しとしたる讀本にして○藥版上等印刷○施本用には割引の特典あり

種種御振舞鈔
正價 郵 一部以上九錢五厘○廿部以上一冊 五部以上一冊 二錢五厘○廿部以上一錢二厘○百部以上七錢 郵稅 十二錢 上八錢○百部以上七錢 郵稅 三錢 二錢○百部以上一錢五厘 郵稅 二錢 五厘○千部以上一錢 郵稅 二錢 五厘○千部以上三錢（小包料ハ別ナリ以下同）

如說修行鈔
正價 郵 五部以上一冊 二錢五厘○廿部以上一錢二厘○百部以上一錢 郵稅 三錢 二錢○百部以上一錢 郵稅 二錢 八厘○千部以上一錢五厘

成佛用心鈔 生死一大事血脉鈔 合冊
正價 郵 五部以上一冊 四錢五厘○廿部以上四錢○百部以上三錢 郵稅 三錢 八厘○千部以上三錢

教行證御書
正價 郵 一部以上一冊 五厘○廿部以上四錢○百部以上三錢 郵稅 二錢 五厘○千部以上三錢

弘通元 東京京橋區新富町六ノ二 師子王文庫事務所

妙行正軌 全

田中智學居士選述（主要部分は三號大文字振がな付）

正價金拾五錢 郵稅 二錢

表面
朝夕勤行式 道場觀○奉請○禮拜○讃歎○讃誦○拜請○正修○回向○發願○歸依○奉送○經文 勤持品偈 別傳唱歌曲譜 宗歌 食法 誦文○食前讃文○食後經文○回向文○大祭祝日回向○精進追善回向○生誕項 經回向○結婚式表白文○臨葬 供養讃文五種 教訣○葬儀表白○葬儀開榜

日本紙 兩面刷 折本

裏面
宗徒肝要の心得●本化妙宗宗綱●本化妙宗信條●御妙判要文○立正安國論○開目抄○撰時抄○報恩抄○觀心本尊抄○三秘法抄○如說修行抄○種々御振舞御書○諸法實相抄○秋元抄

この『妙行正軌』は宗旨の本意を失ひたる雜亂回向式を絕滅し眞正の妙行を恢復せん爲め公けにせられたる所の宗界唯一の正しき回向本なり故に誠信の行者これによりて正しき修行を得らるべし目下宗風の純正を復し逐日眞風を興しつゝあるは此書の行はれたるに因れり

注意！〔迅速普及の便を計り一時に十部以上纏めて申込む向へは特に正價の一割引と爲す送料は別〕

（第四版）

本化攝折論

●田中智學居士述（文章平易總ふりがな付）

●菊版二百七十餘頁◎金字クロース表紙美本

正價一部金五拾錢（郵稅六錢）

攝折問題は取も直さず、日蓮主義の大斷也、本書は古來の異議を解決し、一點の遺憾なからしめたる最新講述にして、證を引き、義を解き、疑を斷じ、眞詮を彰はすこと、最も深切周到にして、いかなる人も一讀して、始めて法華經の眞意義を了解し得べき良書なることは既に多くの閲讀者によりて證明せられたる中、殊に故高山博士の如きは、本書を以て一般世間の學者青年の必讀すべきものとして、『太陽』紙上に廣くこの書を推奬して曰く

『高尚なる議論を行るに平明なる文字を以てし、論斷極めて明快なり、蓋し一部の日蓮主義として見るべきか、是れ一宗一門の徒の私すべきものに非ず、吾人は今の學者青年が、是種の書によりて、其知見を開拓せんことを切望するもの也』（『太陽』八ノ四）

而して博士は當時獨逸に在學中なる、無二の親友たる姉崎博士に此書を贈りて、日蓮主義を其友に鼓吹したり、姉崎氏また本書によりて、大に悟る所ありとの事は、『太陽』紙上同氏の文によりて知ることを得べし

（第三版）

宗門之維新

●田中智學居士撰（附錄『妙宗未來年表』あり）

菊版百四十餘頁上等印刷金字クロース表紙

精巧秘密世界統一妙法廣布圖畫四圖附

正價一部金四十錢（郵稅四錢）（大に讀むべし）

此書は世界統一的大宗教の本旨を發揮する爲め、日蓮主義のいかに深淵洪大なる規模を有せるかを說破したる、古今未曾有壯快極りなき一大奇書にして、眞の日蓮宗門とは、斯の如きものならざるべからざる趣を開示し、且つこの大宗門は、日本國民の俱に護持すべきものなることを啓發し、大に世間の思想界を警覺し、兼て宗門の正氣を喚び起したる本書の成蹟は、先づ彼の高山博士が、一たび此書を見て、平生の邪見を悔め、速かに潔く捨邪歸正したる、有名の事實によりて、之を證すべし、高山博士始めて本書を見て評して曰く

『其意氣の猛烈なる其抱負の高大なる、其思想の深遠なる、而して其文章の雄偉なる、吾人は以て近時宗教界の一大文字なりと稱讃するの、決して溢美にあらざるを信ずるなり』（『太陽』七ノ十一）

東京市京橋區新富町六ノ二

弘通元　師子王文庫事務所

●あまり不思議にきくから人助けの爲めに取次する

奇妙なるはり藥

渡邊氏

妙布

効能は

肩のこり◎りうまちす◎脚氣◎胃病◎はい病◎腦病◎おこり◎子宮病◎癤氣◎痳疹◎瘡毒◎ら い病◎うちみ◎齒痛◎癤◎ちたんぜき◎耳痛◎乳のこり◎きりきず◎しもやけ◎あざ◎やけど◎そこまめ◎すはりだこ◎ようでう◎いれき◎其他なんでもやましき所あらばはりてよし

定價一包金三錢　送料三個迄二錢

岡田三治氏囑托

ぢの藥

痔外用

痔効散

奏効確實保證

試用一日分金五錢
三日分金拾五錢
七日分金參拾錢

これ又『妙布』と同じ趣意て、岡田氏より文庫へ取次を願ひ出られたから取次ぐ痔一切にすべてきく、中には試用分て全治したものもある、痛いくらゐはすぐになをる。同病者はためして御覽あれ、きいたら盛に鼓吹して下さい

此藥は渡邊輝嗣氏が研究大會へ寄附して學生一同試用の結果其妙効に驚き遂に夫れから夫れと大に弘まりて今では離せぬものゝ一つとなつたいかにも良くきくので取次ぐ氣になつた所ろ側護法の篤志より遂に『妙宗』維持のお手傳にもとて製藥主より利益を『妙宗』へ寄附する旨申出られたから一擧兩得で盛に取次ぐことに定めた、先づためして御覽あれ

取次する因縁は

大取次　東京市京橋區新富町六ノ二　師子王文庫事務所

（第四版）

本化攝折論

●田中智學居士述（文章平易總ふりがな付）

●菊版二百七十餘頁◎金字クロース表紙美本

正價一部金五拾錢（郵税六錢）

攝折問題は取も直さず、日蓮主義の大斷也、本書は古來の異議を解決し、一點の遺憾なからしめたる最新講述にして、證を引き、義を解き、疑を斷し、眞詮を彰はすこと、最も深切周到にして、いかなる人も一讀して、始めて法華經の眞意義を了解し得べき良書なることは既に多くの閲讀者によりて證明せられたる中、殊に故高山博士の如きは、本書を以て一般世間の學者青年の必讀すべきものとして、『太陽』紙上に廣くこの書を推奬して曰く

『高尚なる議論を行るに平明なる文字を以てし、論斷極めて明快なり、蓋し一部の日蓮主義として見るべきか、是れ一宗一門の徒の私すべきものに非ず、吾人は今の學者青年が、是種の書によりて、其知見を開拓せんことを切望するもの也』（『太陽』八ノ四）

而して博士は當時獨逸に在學中なる、無二の親友たる姉崎博士に此書を贈りて、日蓮主義を其友に鼓吹したり、姉崎氏また本書によりて、大に悟る所ありとの事は、『太陽』紙上同氏の文によりて知ることを得べし

（第三版）

宗門之維新

●田中智學居士撰（附錄『妙宗未來年表』あり）

菊版百四十餘頁上等印刷金字クロース表紙

精巧秘密世界統一妙法廣布圖等四圖附

正價一部金四十錢（郵税四錢）（大に讀むべし）

此書は世界統一的大宗教の本旨を發揮する爲め、日蓮主義のいかに深邃洪大なる規模を有せるかを覽破したる、古今未曾有壯快極りなき一大奇書にして、眞の日蓮宗門とは、斯の如きものならざるべからざる趣を開示し、且つこの大宗門は、日本國民の俱に護持すべきものなることを啓發し、大に世間の思想界を警覺し、兼て宗門の正氣を喚び起したる本書の成蹟は、先づ彼の高山博士が、一たび此書を見て、平生の邪見を悔め、速かに潔く捨邪歸正したる、有名の事實によりて、之を證すべし、高山博士始めて本書を見て評して曰く

『其意氣の猛烈なる其抱負の高大なる、其思想の深遠なる、而して其文章の雄偉なる、吾人は以て近時宗教界の一大文字なりと稱讃するの、決して溢美にあらざるを信ずるなり、』（『太陽』七ノ十一）

東京市京橋區新富町六ノ二

弘通元　師子王文庫事務所

渡邊氏

妙布

●あまり不思議にきくから人助けの爲めに取次する奇妙なるはり藥

効能は

眉のこり◎りうまちす◎脚氣◎胃病◎はい病◎腦病◎おこり◎子宮病◎瘧氣◎麻痺◎疥毒◎ら◎い病◎うちみ◎齒痛◎癤◎ち◎たんせき◎耳痛◎乳のこり◎きりきず◎しもやけ◎あざ◎やけど◎そこまめ◎すはりだこ◎ようでう◎るいれき◎其他なんでもやましき所あらばはりてよし

定價一包金三錢　送料三個迄二錢

岡田三治氏囑托

ぢの藥

痔外用効散

奏効確實保證

試用一日分金五錢
三日分金拾五錢
七日分金參拾錢

これ又『妙布』と同じ趣意て、岡田氏より文庫へ取次を願ひ出られたから取次ぐ

痔一切にすべてきく、中には試用分て全治したものもある、痛いくらゐはすぐになをる。

同病者はためして御覽あれ、きいたら盛に鼓吹して下さい

大取次

東京市京橋區新富町六ノ二　師子王文庫事務所

此藥取次する因縁は

此製藥は渡邊輝桐氏が研究大會へ寄附して學生一同試用の結果其効能に驚き遂に夫れから夫れと大に弘まりて今では離せぬものゝ一つとなつたかにも良くきくので取次ぐ氣になつた所ろ側面護法の篤志より遂に『妙宗』維持のお手傳にもとて製藥主より利益を『妙宗』へ寄附する旨申出られたから一舉兩得で盛に取次ぐことに定めた、先づためして御覽あれ

妙宗手引草

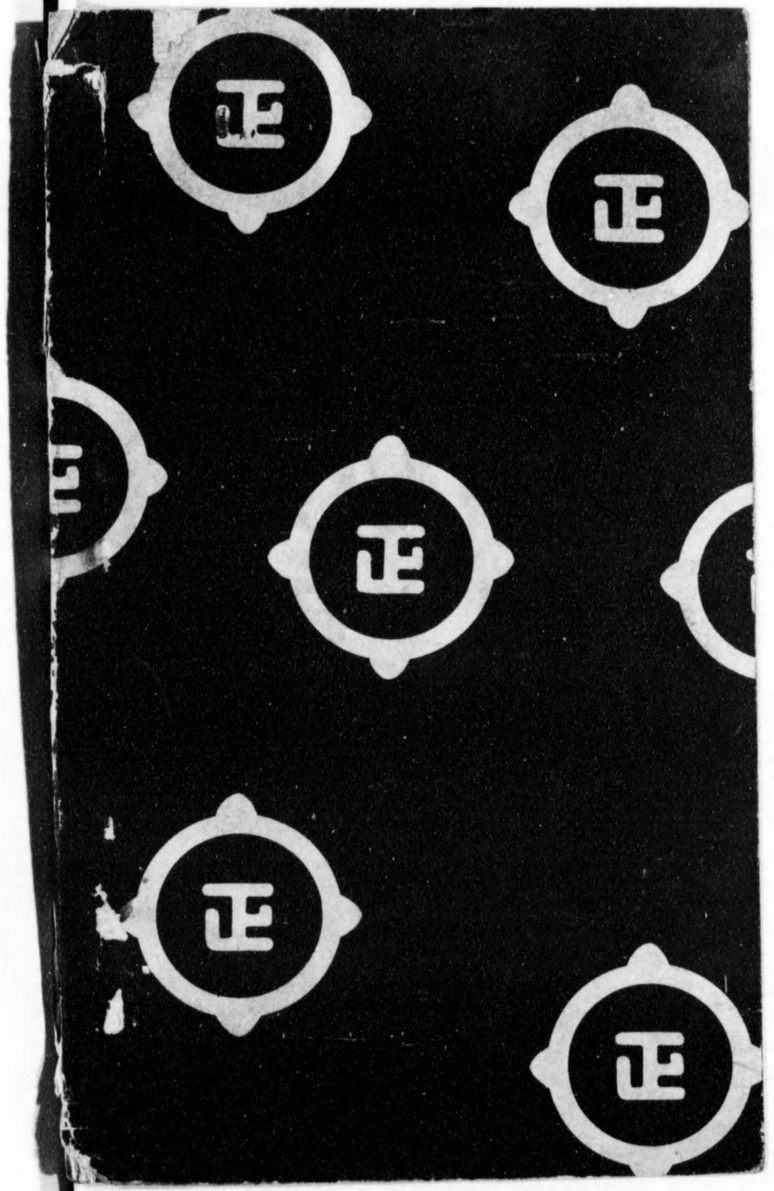
正價　金拾貳錢（送料共）

割引

五部已上　一册金拾錢
五十已上　一册金九錢
百部已上　一册金八錢

目次

(一)人は何故に宗教を要するか
(二)本化妙宗でなくてならぬ理由
(三)本化妙宗の由來
(四)本化妙宗の最勝なるわけ
(五)本化妙宗の正しき信仰
(六)本化妙宗の本尊及修行
(七)本化妙宗に歸入する方法
(八)本化教徒の世に處する心得
(九)本化教徒としての規律
(十)本化妙宗の略史

本化の宗は『一天四海皆歸妙法』を目的として居るから、どし〳〵法を弘めて、他宗のものを改宗歸入させなければならぬ、先づ日本國中上下一人も殘らず法華經を信奉させなければならぬ、之れを果さないうちは自分の身に病痛があッて未だ平癒しないも同樣である、弘めるには教へなければならぬ、教へるには示さなければならぬ、この『手引草』はその目的に供する爲めに出來た布教用の適當書である、宗門のあらましを手ッ取早く解りのよいように說いた本である

東京市京橋區新富町六ノ二
師子王文庫事務所